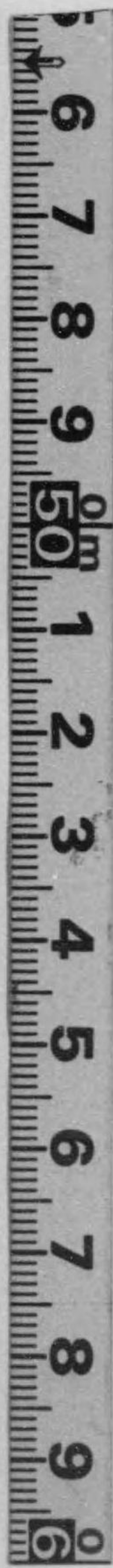


325

471



始



325

471





近代宗教思想講話

清水俊榮著

大正  
5. 12. 25  
内交



我外宗

遺

思

吉永秀子

の

靈

前に

捧

ぐ

逝きし妻

清水對榮著



目次

第一、ニイチエより得たる教訓……………(一)

第二、〔室内〕の人生……………(二二)

第三、近代人の産める聖母マリヤの信仰……………(五一)

第四、タゴールの〔暗室王〕……………(八三)

第五、牧師ブランドの求道生活……………(一〇三)

第六、嚴肅なる人間心……………(一〇六)

第七、戯曲チンタミニの宗教思想……………(三三)

第八、メーテルリンクの運命觀……………(三六)

第九、充實せる生活……………(三七九)

序 序に代へて  
 第一章 先賢の歩み  
 第二章 革命の革命  
 第三章 革命の革命  
 第四章 革命の革命  
 第五章 革命の革命  
 第六章 革命の革命  
 第七章 革命の革命  
 第八章 革命の革命  
 第九章 革命の革命  
 第十章 革命の革命  
 第十一章 革命の革命  
 第十二章 革命の革命  
 第十三章 革命の革命  
 第十四章 革命の革命  
 第十五章 革命の革命  
 第十六章 革命の革命  
 第十七章 革命の革命  
 第十八章 革命の革命  
 第十九章 革命の革命  
 第二十章 革命の革命  
 第二十一章 革命の革命  
 第二十二章 革命の革命  
 第二十三章 革命の革命  
 第二十四章 革命の革命  
 第二十五章 革命の革命  
 第二十六章 革命の革命  
 第二十七章 革命の革命  
 第二十八章 革命の革命  
 第二十九章 革命の革命  
 第三十章 革命の革命  
 第三十一章 革命の革命  
 第三十二章 革命の革命  
 第三十三章 革命の革命  
 第三十四章 革命の革命  
 第三十五章 革命の革命  
 第三十六章 革命の革命  
 第三十七章 革命の革命  
 第三十八章 革命の革命  
 第三十九章 革命の革命  
 第四十章 革命の革命  
 第四十一章 革命の革命  
 第四十二章 革命の革命  
 第四十三章 革命の革命  
 第四十四章 革命の革命  
 第四十五章 革命の革命  
 第四十六章 革命の革命  
 第四十七章 革命の革命  
 第四十八章 革命の革命  
 第四十九章 革命の革命  
 第五十章 革命の革命  
 第五十一章 革命の革命  
 第五十二章 革命の革命  
 第五十三章 革命の革命  
 第五十四章 革命の革命  
 第五十五章 革命の革命  
 第五十六章 革命の革命  
 第五十七章 革命の革命  
 第五十八章 革命の革命  
 第五十九章 革命の革命  
 第六十章 革命の革命  
 第六十一章 革命の革命  
 第六十二章 革命の革命  
 第六十三章 革命の革命  
 第六十四章 革命の革命  
 第六十五章 革命の革命  
 第六十六章 革命の革命  
 第六十七章 革命の革命  
 第六十八章 革命の革命  
 第六十九章 革命の革命  
 第七十章 革命の革命  
 第七十一章 革命の革命  
 第七十二章 革命の革命  
 第七十三章 革命の革命  
 第七十四章 革命の革命  
 第七十五章 革命の革命  
 第七十六章 革命の革命  
 第七十七章 革命の革命  
 第七十八章 革命の革命  
 第七十九章 革命の革命  
 第八十章 革命の革命  
 第八十一章 革命の革命  
 第八十二章 革命の革命  
 第八十三章 革命の革命  
 第八十四章 革命の革命  
 第八十五章 革命の革命  
 第八十六章 革命の革命  
 第八十七章 革命の革命  
 第八十八章 革命の革命  
 第八十九章 革命の革命  
 第九十章 革命の革命  
 第九十一章 革命の革命  
 第九十二章 革命の革命  
 第九十三章 革命の革命  
 第九十四章 革命の革命  
 第九十五章 革命の革命  
 第九十六章 革命の革命  
 第九十七章 革命の革命  
 第九十八章 革命の革命  
 第九十九章 革命の革命  
 第一百章 革命の革命

目 次

序に代へて

わけあつて故郷の地をひそかにしのび出ましてから、私は東京の郊外に茅屋を借りて、病む妻の看護の傍ら此本の筆を執り始めました。それは昨年の秋のコスモスの咲く頃でありました。

「妻は、私の筆の滲りがちなのを氣に病んで、「早く私の病氣がなほらなければ、あなたにお氣の毒だ」と、嘆くのが屢々でした。」

或日のこゝ、妻は私にかくれて、職を求めに出かけました。そして夜おそく歸つて来て、「地方の口なら澤山あるやうですが、東京の女學校ではどこも満員なそうです」と、その日訪ねた女學校の様

なきを語りながら涙ぐんでゐました。その翌日から妻の病氣は彌が上に悪くなつて、床から少しも出られなくなりました。

それ以來、一年の間、私が馴れない水仕事や看病の片手間に筆を執つてゐる私の姿を見まもつて、妻はみんなにか悲しい思ひをしたでせう。コスモスの花は再び咲き出しましたけれど、妻は此本の出版を見ずに此世を去りました。

死ぬ二日前の夜でした。妻は瘠せた大きな腫をバツチリ開いて、傍にゐる私をつく／＼見ながら

「あなたはなぜ斯んな小さい部屋に私を閉ち込めるんです。私を座敷へ連れて行つて下さい。座敷には尊いお方々が私を待つてゐられ

ます。あなたには、あれが見えませんか。それ、死んだお母様もあのうちに居られます。そして皆が喜んで私を迎ひに來られました。早く連れて行つて下さい」

そう云つて私の手にすがりました。

私は恐しさにふるひました。私はほんこに「小さい部屋」に満足しやうとして居つたことを知りました。けれど臨終の妻が教へて呉れたやうに、私にても、そういつまで此「小さい部屋」に止つて居られませう。

私も亦、尊い魂達の居られる方へ一日も早く行きたいと念じてゐます。

妻の死後三週日を経て

大正五年十月

著者

識

妻の死後三週日を経て... 著者... 識

ニーチエより得たる教訓

善にもあれ、悪にもあれ、一個の創造者たらんと欲するものは、先づ破壊者となりて、價値を粉碎し去らざる可からず。乃ち最高の悪は、最高の善に屬す。さればその善は創造するの善なり。

大兄よ

私は一週間の傳道旅行を終へてから久し振りにしんみりした氣持ちで机の傍に坐つた。今は夜である。殊に春の夜の柔かい空氣は、私のやうな粗雑焦燥のものにもいつかしら尊い落ち付きと柔かい慈しみの心とを與へてくれる。春の夜の空氣には多量

の光りと熱とを含んだ重さがある。そしてその心地よい重さは離れてゐる人達の心までを溶してゆるやかに渦を巻きながら流れるやうだ。昔の詩人は一刻の春の夜にも千金の価値を認めたが、なる程此尊い氣持ちを與へてくれる春の夜は千金に代へられぬ寶玉である。

夜はだん／＼深くなつてくる。静かになつてくる。私は電燈を眺める。小さい電燈ながら、その輝きは張りつめ合ひに張りつめた聖書の魂のやうに私の心の隅々までも照してくるやうだ。私は此光りの下にうなだれてさま／＼なことを思ひ出す。そしてその思ひ出すことがすべて自分にとつて尊く懐しい。今迄危険視して避けて居つた人達の言論などにも斯うした時には却つ

て親しい人間味を發見したり、又は其人達の根本に横はつてゐるあるものの中に自分を發見したりする。それは私にとつて此上もない悦びである。

私は先き程からニイチエを思ひうかべてゐる、そしてそれに次いでトルストイを思ひうかべてゐる。御存知の通りニイチエとトルストイとはその學說に於ては正反對に立つべき人である。けれどその兩極端の人物が不思議にもその人となりの上に於て考へてゐると一人の魂のやうになつて私の方へ歩いてくる。そして二人の學說や人生觀はともかくも、人間としての叫びの上に私をめぐらしめる幾多の尊い寶玉が藏されてゐることを思ふ。私には抱きしめてやりたいやうな尊敬と慈愛の念が湧いてくる。



そして此心のなごみは古來幾多の真人を思ひ出して限りない崇敬に涙ぐまずにゐられない。その人達はすべて私一人の救ひの道に立つて、私の幼な心をして成長せしめんと念じてゐてくれる。私は感謝せずにはゐられない。私は更に遙かに続く無窮の旅路のあることを思うて悦躍する。

ニイチエは歌うてゐる。

夜は來れり。今總ての進る泉は聲を高めて語る。我が魂もまた進る泉なり。夜は來れり。今愛する者の總ての歌は始めめて醒む。我が魂も亦愛する者の歌なり。

大兄よ。まことに今は夜である。しかも懐しき春の夜である。私の心も亦、今此静かな夜の深みに驚いて何ものかを語り、何もの

かを歌はんとしてゐる。大兄よ。願はくば今宵私の胸に鳴り響くニイチエの聲を暫くの間聽いて呉れ。

大兄よ。

私達の普通考へてゐる處では、他人にもものを施すことを善いことと思つてゐる。それにはちがひない。けれどそこには眼に見えぬ幾多の危険が隠れてゐることを私はニイチエによつて教へられた。ニイチエは斯う語つてゐる。常に與ふる者の危険は、羞恥の念を失はんとすることだ、なぜなれば常に頽ち與ふる者は、願ち與ふることにはのみ専なるが故に、其手と其胸とは共に傲慢に硬ばつて仕舞ふと。大兄よ、先づかの慈善家と稱するものの傲慢と説法者と稱する者の無恥とを思ひ出してくれ、然るのちに漸く自



は今夜の深みにあつて無限の驚異を此言葉の上に感じ始めてゐる。大兄よ、いつ頃であつたか思ひ出せないけれど私の讀んだ本の中に、エヂプトの曠野に咲く香高いバラの花のことが書いてあつた。その花は春の暮れ方、星の煌めきのやうに眩亂の姿を誇り、高い香を四邊にただよはせると云ふ。忘れもしないがその本の中には「旅人よ！その花の一輪を摘み取つて見給へ、おん身は必らずその高い香に驚いて更にほの暗い雄蕊雌蕊の奥へまで探ね入るにちがひない。けれど旅人よ、心し給へ、その奥に必ず憐れな羽虫の死骸を見出すであらう！」と云ふやうな感傷的の文句があつた。大兄よ、小さな羽虫が濃艶の香に窒息されて一命を失ふに至る慘ましい経路を思つて呉れ給へ。そしてその小さな羽虫の生

涯が取りもなほさず私達の象徴ではなからうか。

げにも金錢に迷うて金錢に殺され、名譽に迷うて名譽に殺され、生命に迷うて生命に殺され、學說に迷うて學說に殺され、趣味に迷うて趣味に殺され、佛に迷うて佛に殺され……斯うして一々擧げては際限もないことであるが、熟思すればする程自分が恐しい。實際無自覺の自分が恐しい。金錢が穢ないのではない。名譽が恐しいのではない。恐るべきは盲目の自分である。大兄よ、一度び自分の本城に歸つて見れば何も云ふことが出来ない。聲を飲んで泣くのみである。

ニイチエは叫ぶ。

今我が鐵鎚は其牢獄に對して狂憤す。石片は霏々として飛

び散る。何物の我に關するところぞ。

敬虔にして雄々しい我が詩人は遂ひに鐵鎚を自己の牢獄に向けた。石片は霏々として飛び散る。されど飛び散らば散れ破壊するならば破壊せよ、然らざれば眞實の泉は沸騰しない。靈に渴したるニーチエは其泉を飲まねばならなかつた。かくて我がニーチエは蘇生して聲を張りあげて唱つた。

焔の槍もて

我が魂の氷打碎く汝よ

かくて今や魂は音立て流れつゝ海の方へ

そのいと高き望をもて急げり。

常に明かに又常に健かに

極めて愛すべき束縛の中に自由に……

かくて魂は汝の不思議をたへふ

いと美しき一月よ

かうして始めて生命の第一月を迎へた彼の誕生の聲は、まことに近代思想の曙を嚴飾してゐるではないか。若しニーチエの言葉を借りて云ふならば彼の聲は萬人の聲にして又何人の聲にもあらざる聲である。

大兄よ、ニーチエの子供心は偽善を最も悪んだ。多くのバラの花多くの「甘き言葉」を悪んだ。彼の敵は所謂世の善人であつた。眞實らしく装うた偽眞者であつた。そして此眼に見えない程の小さな溝渠ほど恐るべきものはないと云つてゐる。なぜならば

眼に見える程の大きな溝渠は何人によつても避けられるが、小さなものには知らず識らずに陥ち入るからである。故に小さな溝渠が自分達を落し入れることから見れば却つて偉大な溝渠となる。彼れは最も小さき溝渠は最も橋を架するに難しと云つてゐる。

彼は自利を没却して徒らに利他のみを説く所謂商賈的慈善博愛主義者に對して、宦官道德者と云つた。それは生存からその偉大なる性格を取り去つて、人類をして憐むべき宦官的狀態に墮落せしむるからである。しかも多くの人はそれを望んでゐる。そして去勢されたやうな宦官的の人間を以て高德の人の如く信じ切つてゐる。肉食妻帯を禁ずることを良いことと思つたり、松の

露でも飲んで生きてゐることを清められた生活のやうに思つたり、所謂石佛のやうになることを悟つたもののやうに思つてゐる。所謂煩惱を斷じて涅槃を得やうとする連中を彼は「近眼のお人好し」と云ひ、更に之等の所謂善人に對して「善人は眞理を語らず。善人は汝等に教ふるに諸々の虚偽の岸と安固とを以てす。汝等は善人の虚偽の中に生れ且つ育てられたり。總ては善人によつて根柢に至るまで虚偽となり曲げ損はれたり」と叫んでゐる。そして彼の子供心の狂噴は「世を誹毀する者が如何なる害毒をなすとも善き人の害こそ最も有害なる害毒なり」とまで叫ばなければ氣がすまなかつた。

彼は他人に良い人間だと思はれることを恐れた。彼の云ふた

言葉がまた一つの型として取り扱はれやうとする危険を思つて身慄ひした。なぜなれば彼自身独自の天地にあつて無碍の大道を活歩せんことを要求したやうに、他のものにも各々独自の天地に眼ざめんことを熱望したからである。恰度親鸞が「親鸞は弟子一人も持たず候」と云はれた時のやうに、彼はお人好の師匠顔をして取りすましてゐられない。宗祖として幾多の人々を殺すことが出来ない。即ち各々が直ちに彌陀の本願によつて救はるべきものであるからだ。

彼は歌ふ。

我が弟子達よ、今我はたゞ獨り行く。汝等もまた行け、獨り行け。我之れを欲す。

常に唯だ生徒としてののみあらむは、好く教師に報ゆる所以にあらず。汝等如何なれば、我が花冠を挽ぎ取るを欲せざるや。汝等は我を尊敬す。されど汝等の尊敬の覆らん曉は如何に。彫像の汝等を殺さざらんやう汝等心せよ。汝等なほ自らを索めざりき而るをはや我を見出てぬ。總て信徒の爲す所此くの如し。總ての信仰に價值少なき所以こゝにあり。

今我は汝等の我を棄て、汝等自らを見出てむことを汝等に命ず。而して汝等が總て我を拒否せんとき始めて我は汝等に歸へり來るべし。

大兄よ、先き程から降り出した雨が段々強くなつて來た。ふと氣付いて僕の姿を眺めると寂しそうな電氣の下で小さくすくん

てゐるのが如何にも憐れそうに思はれる。雨の音は寂しいものの魂と共に踊つても居るやうに思はれる、ニーチエもその中に混つてゐるやうだ。

私はまたニーチエを思ふ。私はニーチエの學說や主張に向つてはいつも親しみが見出せなかつた。そして今もなほ私と他人である。けれどニーチエの詩や、一個の人間としてのニーチエを思ふごとに、やはり自分達と同じ弱い寂しい人間であつたと思ふ。また弱い寂しい人間であつたればこそ、あんな強い道德、所謂帝王の道德を主張せざるにゐられなかつたのだらうと思ふ。殊に彼の純真の子供心は外に向つてまで狂噴の斧を向けたけれども、彼はその岩石を碎き盡さぬ前に自分が斃れなければならなかつた。

彼は遂ひに狂うて死んだ。「氷は近い、孤獨は恐しい……然しすべての物が如何に光の裏に實に靜かに横はつて居るか。彼は氷のやうな寂しい孤獨の道を益々遙かへ辿つて、余がこれまで解し來り體驗し來りたる哲學とは自ら進んで氷と高山とに入る生活である」と云つた。けれど彼は遂ひにその氷に窒息された。

大兄よ、私は今ゴルキイの「夜の宿」の中にある小さい挿話を思ひ出した。シベリアに病氣に罹つてゐる男があつた。その男は此世のどこにかきつと正義の國があると信じ切つて居つた。その國には異常な立派な人間が住んでゐて、互に助け合つて愉快の生活を送ることが出来ると思つてゐた。彼は貧乏で、病氣で、その日／＼さへ送れないやうになつて居つたけれど、彼は失望しなかつ

た。そして正義の國へ必らず一度は行けるものと思ひ込んで、時々それを思ひ出して獨りて微笑んで居つた。ところが或日のこと、一人の男が追放されて來た。その人は學者で、本だの地圖だの、いろんな道具だのを擔いで來た。するとかの病人は早速その學者を訪ねて、「一體正義の國はどこにあるのですか、どうしたらそこへ行けるのですか」と云ふ風に問うた。そこで學者は地圖を擴げて一生懸命に探したが、他のことはよく出て居るけれど正義の國だけはどうしても見出せなかつた。學者は正義の國はないと云ふけれども、その病人は中々承知しなかつた。

「若し正義の國が出てゐないなら、あなたの地圖や本は一文の價もありません」

「わしの地圖はどこまでも正確だ。全體正義の國などいふものはどこにも無いのだ」

「なんだと。今迄おれが、永い、永い間、辛抱を重ねて生きて來たのも、畢竟どこかにさういふ國があると信じてゐたからだ。ところが貴様の地圖によると、全然そんなところは無いんだ。そりや泥棒も同じことだ。やいろくてなしめ！」

その男はブリ／＼怒つて學者の頭をなぐり飛ばした。そして家へ歸へると彼は首を縊つてしまつた。

話はそれで終つてゐるが私にはいつも此悲惨な男が思ひ出される。大兄よ、ニイチエの一切の價值轉換は、群集から正義の國を奪ひ取つたのだ。群集の信じ切つてゐる正義の國を否定したの



だ。そして彼は更に偉大なる正義の國を群集に與へやうとした。それは地圖の上になく、科學によつて造られる國でない、けれどもそれよりもつと嚴然として輝いてゐる眞實の國である。でも群集は、やい、ろくてなしめ。やい、自我狂めと處々方々から冷罵した。そして憐れむべき天才ニーチェは此理解なき徒らなる傲慢の冷笑裡に死んで逝つた。けれど我等は未來の樹に我等の巢を構ふと叫んだ彼は、今尙ほ満足して地下に眠つて居るにちがひない。

大兄よ、暴風を持ち來るは、いと靜かなる言葉なり、鴿の脚によりて來る思想は世界を導く、てふ彼の言葉を繰り返へしながら私は靜かなる眠りに就かう。雨はまだ晴れない。深い夜に雨の音を

聽いてゐると、思ひ出す總べてが懐しい。大兄よ、さらば、御光りの下に！

——善人なほもて往生をさぐ、いはんや悪人をや……親鸞——

## 「室内」の人生

—メーテリンクより—

—  
どこと云ふあてもなしに散歩した日を想ひ出して見る。寂しいさすらひの胸を度しく抱きしめて名も知れぬ細い街々を歩いてゐるうちに日がだん／＼暮れかゝる。寂しい胸は彌が上にも寂しくなる。たそがれの霧は往來の人々をしめやかに濕ぼして不可思議の夢を莊嚴する人々のやうに化し去る。そのうちに軒々の灯が意味ありげにまたゝき始める。寂しさは物悲しさと溶け合うて涙を催させる。斯うした寂しさは、山や海にさすろふ時の

寂しさよりも一層人間味が多く、人生に對して一層深い怪しさを感じさせる。  
通りすがりの人々のあわたゞしさよ。路傍に佇んで、離れたり合つたりする人々の影を見てゐるとさながら活動寫眞の影畫像でも見てゐるやうだ。その一つ一つの影は、今現に生きてゐる人々の影には相違ない。けれど何處より來り何處へ去り行くか解らない幻のやうにも思はれる。あはれ斯うして眺めてゐる自分の影も共にもつれて怪しげに見えるではないか。影は影であつて自分ではない。けれど自分があればこそ影もあり自分が無くなれば影もなくなるのだ。影と影とは寂しくも接吻する。魂は顫律する。

自分達は更に人影少ない暗い小路へ這入る。ふと見上ぐれば誰の家かは知らないが、その家の窓から灯がさしてゐる。やがては人の影がうつる。その影を眺めながら自分達はさまざまに空想をしてみる。自分達の胸には怪しいけれども嚴肅な、静てはあゝるが遙か悠久の人生の姿が想ひ浮ぶ。世には人々の生涯ほど不可思議に充ちたそして嚴肅のものはない。

自分達はいつも或る室内にゐる。そして室外のはるかな暗の中に誰が眺めてゐるかを知らないで、小さいランプを圍んで家族と稱するものと共に泣いたり笑つたりしてゐる。自分達は眼を開いてゐる。そして物を見てゐる。けれど自分達は何を見てゐるのだらう。自分達は解つたと稱してゐる。けれど何が解つて

ゐるのだらう。あはれなる室内の飾り人形よ。自分達は今室外に何が起りつつあるかを知らないで、幸福なりと稱して静かに微笑んでゐるのではなからうか。メーテルリンク氏は斯うした無智の悲慘を戯曲室内によつて物語つてゐるのであります。

## 二

黄昏になつて河岸の上には闇が降り始める頃一人の男が河を見つめながら歩いて來た。その時その男は蘆の生えた水邊に妙なものを見出した。近寄つてよく見ると、それは若い娘の頭で、髪の毛が流れにつれてゆら／＼と動いてゐるのであつた。男は驚いて岸へ引きあげたけれど、もう蘇生させるには遅かつた。そうしてゐるうちにその娘を知つてゐる老人や、老人の孫娘や、村の百

姓共が来たので、此男は老人と共に娘の死を知らすべく娘の家を訪れることになる。老人と男とは用心深い様子で娘の家の庭に這入る。此劇曲は之れから始まるのです。

老人と見しらぬ男とが忍び込んだ庭は見るからに古びたそして大きな柳が澤山茂つてゐた。彼等はその木影から娘の家族がどんなにしてゐるかを先づ見やうとした。家族は自分の娘が死んでゐるのも知らずにランプを圍んで靜かに宵の集りをしてゐた。父親はストーブの片隅に母親はテーブルに肘をかけて空を見つめ白い着物を着た二人の娘は刺繡をしながら此靜かな室に黙想したり微笑したりしてゐる。そして幼兒は母親の左手に頭を休めて眠つてゐる。その一々の身振りや舉動が窓ガラスを透

していかにも嚴かに、緩かに、また離れ々々になつて、何となく神秘に見える。

嗚呼おろかなる人間の姿よ！

老人と見知らぬ男とは、彼等が今にも娘の慘死をこの家族に聞かせたらあの平和が急に破れることを思つて怖れる。謂はば彼等は此家族の運命の鍵を握つてゐるやうなものだ。彼等はその鍵を永久の秘密の淵に役げ込むことが出来ない。手に握つてゐるけれど渡さねばならぬ鍵である。人は或る程度まで運命を知ることが出来ても運命を全體變へることが出来ない。それは只如來の御手を待つよりほかに他の何物もゆるされない。娘の死は到底話さずにゐられないことだ。けれど同じ話すに

してもゆるやかに遠まはりに話した方がよからうか、それとも急に露骨に打ちあげた方がよからうか、その話し方の如何によつて此家族の悲しみを幾分か救ふことが出来るかも知れない。けれどそれも悲しい哉や人間の考によつて計り知ることが出来やうか。「室内」の人間も人形である。けれど室外の人間と雖五十歩百歩の人形ではないか。凡情としては遠廻しにゆるやかに告げたい。けれど眞實の聲は急に露骨に眞情を告げてその結果はひたすら如來のおん手におまかせするより他の術がないことだ。

老人と見知らぬ男とは、今にも被壞せんとする一家族を前にひかへて計りがたき人生の姿を泌々感ずる。私共は此二人の會話を通してメーテルリンク氏の人生觀や運命觀を聞くことが出来るのです。

るのです。

## 三

老人と見知らぬ男とは一心に室の中を見つめてゐる。見知らぬ男は云ふ。

「私達を見てゐるやうです」

「いや、何も見てゐるのではない、目を据ゑてゐるまでだ。……………」

誰も不幸がありさうに思つてゐない、みんな黙つてゐる。」

「何か合圖をして父親に悟らせるやうにしませうか！こつちへ顔を向けました。窓を叩きませうか？あの人達の中の誰か、最初に聞く方がいゝてせう……………」

「どうしていゝか私には解らない……………餘程氣をつけてしなく

てはいけない。父親は年老つて弱つてゐる——母親もやはりさうだ——それに娘達はまだ幼いのだ。……私達に出来るだけ手短かに、ほんの只事のやうにいつた方がいゝやうだ。そして私達は餘り悲しさをにしてはいけない、でないとあの人達は私達より一層餘計に悲まなければならぬやうに思つて何うしていいか判らなくなるかも知れぬから……

と、老人は答へる。そして何事もないやうな風をして、いつものやうに戸を叩いて這入つた方がいゝと老人はつけ加へる。老人は時々此家を訪れて交際をしてゐる間柄だから別段此家族があやしむ筈がない。けれど見知らぬ男はたゞ通りすがりの男で此家族の人達には知れてゐない。平穩無事を装ふためには老人が

只一人で行くべきであるが、不幸といふものは一人の人の聲ていはれると一層はつきりとして力強くひびくものである。そして老人の發する最初の言葉がどんな怖しい結果を引き出すかも知れぬ。殊に母視の命は細い糸に吊されてゐるやうなものだ。強い刺撃はその糸を斷ち切りかねない。老人はそれを知つてゐる。是非二人で行つて餘計の言葉を云つて最初に寄せてくる悲しみの波の力を弱くする方が得策だと云ふ。なぜなればいくら無頓着な話でも話してゐるうちには自然と幾らかの悲みを持つて行つてくれる。さうすれば骨も折らずに音もなく空氣や光のやうに散つてしまふから。

斯んな話をしてゐるうちに室内に刺繡をしてゐた二人の娘が

急に窓の方へ顔をむける。けれどたゞ顔をむけたばかりでまた元の姿勢に復る。勿論室外の二人にはまだ誰も氣付かない。

室外の二人は死んだ娘を思ひ出して話し合ふ。

娘の死んだ理由は解らない。それが自殺であるか、又は誤つて河に落ちて死んだのか誰も知ることが出来ない。けれど老人はその日の朝會堂から出て来るその娘に逢つた。娘は河の向の祖母さんのところへ行くのだといつてゐた。娘は何か老人に尋ねたささうな様子であつたが、云ひにくそうにして急に行つてしまつた。だが老人は今になつて考へて見るとその時の一々の娘の舉動が如何にもはつきり頭に浮んで來てすべてが不可思議な人の一生を見せつけられたやうな氣がする。

### 最後の微笑！

その微笑は思ひ出すさへ不可思議の感じを老人の胸に彫り付けた。それは物を云ふまいと思ふ人、人に理解されまいと思ふ人のするやうな微笑であつた。彼女には希望も苦痛のやうに思はれてゐるやうであつた。彼女の眼は覆ひ隠されて、老人をはつきり見ることが出来ないやうであつた。「あの娘は今朝まで生きてゐたのだ！」と老人は嘆く。

百姓の話によれば、彼女は晝頃からずつと土堤の上を歩いてゐたさうだ。百姓は彼女が花を探してゐるのだと思つてゐた。……彼女はやはり花を取らうとして誤つて河に落ちたのであるまいか。見知らぬ男は娘の死因を多分その爲めだらうと老人に物

語る。

「いや誰れにも解らない……何うして解るだらう？」と老人は自分の人間観を語る。「あれは思ふことを口に云へないやうな人間の一人に相違がない。人は死なうと思ふ時にはきつと一つより以上の理由があるものだ。恰度あの部室は見る事が出来ても人の靈魂は見る事が出来ないと同じやうなものだ。誰でもそのやうなものだ。誰でも些末な事を云ふだが、それに間違ひのあるといふことに気がつかない。……人は生命のない人形はやうに見えることがあるけれども人の靈魂の中に絶えずいろい로운物が往來してゐる。人は自分が解らない。……あの娘も昨日の晩にはあの姉妹と同じやうにランプの灯影に座つてゐた

のだ。もし此事が起らなかつたらお前さんはあの人達のほんとうの姿を見ることが出来なかつたのだ……私は初めてあの娘が解つたやうに思ふ……私達の日常生活には私達の解らぬうちに何かしら新らしいものが入つて來てゐるのだ。その人達は夜晝とも私達の傍にゐるのだが、それが永久に私達と別れを告げる其瞬間までそれをほんとうに見てゐないのだ。だがそれにしても自分のいふことだけをいひ、することだけをして行つたあの娘はなんと云ふ不思議な可哀想な飾りのない底のない心であらう？」

四

室内の人々はどんなにしてゐるだらう。



彼等はやはり誰れも他人が見てゐるとも知らずに静かに室の中で微笑んでゐる。誰も心配をしてはゐない。さながら死んだ母親の乳房に取りすがつて微笑んでゐる幼児のやうに。老人は此光景を只に室内の人々の身の上とのみ思ふことが出来ない。「私達とてもやはり見られてゐるのだと嘆く。「みんな危険の届かぬところにゐると思つてゐるのだ。戸も閉めてあるし窓には鐵の懸金が下してある。……要心の出来るだけはみんな要心してゐる。……かうしてあの人達を見てゐない方がよかつた。私は戸を叩いて静かに入る、そして手短かな言葉で打明けてしまふより他に仕方がないと思つてゐたのだ……」けれど老人はあまりに長く彼等を見つめて色々のことを思ひつゞけた爲めに、

怖れは更に怖れを生むばかりである。そこへマリーと稱する老人の孫娘が来て、百姓共が娘の死骸をもう運んで來つつあることを知らせる。老人は驚いて、

「どの道を來るのだ」

「あの細い道を來てよ。みんなゆつくり歩いてゐます」

「お祖さん、もう話したのですか」

「この通り何にも話してゐないのだ。みんなあゝしてランプの光の中に静かに座つてゐる。ご覽！ご覽！人生といふものは何んなものかお前に解るだらう……」

「まあ！何といふ静かなんでせう！まるで夢の中にある人でも見てゐるやうですわね」

人の心の張りつめた時にのみ感じらるる静寂が四邊にたゞよ  
う。みんな深い沈黙に陥入る。不可知の靈魂は暗に溶けて波打  
ち流れるやう。マリーの若き胸は此嚴肅の波にうたれて顫えあ  
がり、老人の胸にピッタリ寄り添うて「お祖さま！」と一言叫ぶ。老  
人は抱きしめたまま泣くものではない、な、いつかは自分の番にな  
るのだと涙をかみしめる。

室内では姉妹二人が外の方を見つめてゐる。一人の娘は第一  
の窓から、他の娘は第三の窓から二人とも両手を窓ガラスにあて  
て闇を凝視してゐる。何か探してゐるやうでもあり、又何か聴い  
てゐるやうでもある。二番目の方の娘は何やら心配さうな顔に  
見える。見知らぬ男とマリーとは、その娘の顔を見ながら、もうそ

ろ／＼知りかけたのではないかと怪しむ。老人は静かに語る。

「可哀想に、例へ十萬年のあひだ見てゐても何も見えるものでは  
ない……夜はこんなに暗いのだ。みんな此方を見てゐるが、不  
幸の來るのは向ふの方なのだ。」

老人は尙も語り出す。

「よしんば二人の娘があれを見たとしても氣がつかぬかも知れ  
ない。例へ背を向けてゐても、不幸は一步一步と進んで來る。そ  
して二三時間の内にはつきりと見えて來るのだ。それに止つて  
呉れとはいへない、また持つて來るものにも止める力がないのだ。  
不幸は人を使ふ。また人は不幸に使はれるのだ。不幸は目標を  
持つてゐる道が開けてある。不幸は倦きることはない、いつでも

同じ考を持つてゐる。人は不幸に力を貸してやる。人はそれを  
悲みながらも、傍へ寄つて行く。心に悲しみを懐きながらも、やは  
り進んで來なければならぬのだ……。

老人の聲は段々悲愴に、段々静かにはつきりしてくる。そして  
マリイの顔は段々悽愴に變つて行く。

「お前の顔は何うしてさう蒼白めてゐるのだらう？ 私達は口に  
云ひ表はせぬことがあるからだ、それで私達が泣くのだ。世の中  
にはこれほど悲しいことはない。これほど見てゐるものを怖れ  
させるものはない。あんなに静かな様子をして座つてゐるのを  
見ると、よしんばこんな事が起らないにしても私には怖しいのだ。  
老人は八十三の今に至つて始めてしみじみ人生の姿を見たや

うに思つた。それはなぜだか彼にもよくは解らないけれども老  
人にはあの室内にゐる人達の姿がいかに真面目な嚴かのもの  
に見えた。彼等は一人二人の人間ではなくて、人生全部の象徴の  
如く思はれた。あの人達は何も知らずにランプの灯影にちつと  
坐つてゐる。それはさながら人間が小さな理想の光の下に安然  
として座つてゐる悲愴の象徴でないか。彼等は戸を閉めてゐさ  
へすれば何事も起るまいと思つてゐる。けれど物事の起るのは  
心の中のことだ。  
人は他のみを知らうとし、他のみを防禦しやうとしてゐる。そ  
してみんな自分の小さな生活に安心してゐる自分のことを何も  
知らないてゐる。慘しくも他人の方が一層よく自分の事を知つ

てゐる。

マリーは室内の人を眺めて可哀想なものだと老人に物語ると老人は可愛相なものだよだが、誰も私達を可愛相とは思つて呉れないと答へる。室の内外を問はず人間は共に悲しいものでないか。惨しい可愛相なものでないか。室外の人々は室内の人々が知らないほんの少しの事を知つてゐるばかりに、さながら他の世界から見下しててもゐるやうな聰明の理解と叡智とを持つてゐるやうだ。だが、室外の人々も自分と云ふ室内に就いてはやはり盲目である。例へ十萬年のあひだ眼を見張つてゐても何も見ることが出来ないであらう。我が人生の惨しさよ。如來のおん目より見そなはせ給ふならば賢と云ひ愚と云ひ共に惨しきかぎり

であらう。賢愚は假の姿である。謂ふ所の賢はむしろ愚よりも一層惨しい愚かも知れない。我が祖聖の求め給うた一道は賢愚の道でなかつた。それは有無の二見を超絶した本願眞實の「救ひ」の一道ではなかつたか。「大聖おのゝもろともに凡愚底下の罪人も誓願の眼から見たら等しく逆惡の群盲である。

## 五

マリーは死の報知を明朝あかるくなつてから告げた方がよいと云ふ。老人もその方がよいかも知れぬと首を傾げる。なぜなれば、同じ悲しい話でも夜聞くよりも晝の方が幾分か悲しくないかも知れぬから。けれど老人は又考へなほす。不幸に逢ふ人は他人より先にそれを知りたがるものだ。そし

て不幸はかく人を疑ひ深くさせるものだ。老人には斯う云う人間の心理状態を知りながらしかもそれを聞かさずにゐることは何んともなく怖しいことのやうに思はれる。たとへそれが不幸であるにもせよ、それはあの人達の所有品のやうなものだ。それを中途の人が小手細工をして渡すべきものを渡さないことは一種の盗みのやうに思はれる。

老人がこんなことを止めどもなく考へ込んでゐるうちに時は刻一刻と過ぎて行く。娘の死骸をかついてゐる群集はもはや垣根のところへ近寄つてくる。

そこへマリーの妹のマルタが急いで這入つて来て「みんなを連れて来てよ……道で待つてゐるやうにいつておきましたと云

ひながら、室内の方を眺めると、マルタの豫想に反して誰も泣いてもゐなければ悲しさうにしてもゐないので、まだ老人たちが室内の人達に報知しないのだとさつてマルタはキツと老人に向つて責める。

「まだあの人達にはないのですね！」

「マルタ、マルタ、お前は未だ若い、お前には解らないのだ」

「どうして解らないのでせう！……それではいけません、お祖父さま……いえ私は行つて打ちあけてしまひませう」

「お待ち、そして暫く見ておいて」

「まあ、可哀相に！あの人達はもう待つてはゐられないのです……

なぜ？」

「なぜつて、私には解らないけれど、でもそんなことがある筈がないのですもの！……お祖父さま、私は悲しくなつてよ、もう見てゐられないの。何うしていいか自分でも判らなくなりまして」

「いや、マルタ……お前はまだ若い、お前はもう忘れることが出来なくなるかも知れない。死を目前に見る人の顔は何んなものかお前には解らないのだ。多分泣くだらう……でも振向いてはいけない。或はまたぢつとしてゐるかも知れない。例へぢつとしてゐても、決して振向いて見るではないぞ。人には悲みの通る道は解るものではない。大抵は小さな歎泣きが底の方から込みあげて来るものだ。私はその歎泣きを聞いて何うしていいやら私にも判らないのだ……それはこの世の物ではないからだ

老人は充ち溢れる悲しみの底から漸く力を得て一人で行かうと決意する。群集はつひに庭先さへ這入つてくる。老人は出て行く。マリイもマルタもその他の人々は息を凝して今にも破裂せんとする人間の魂を凝視めてゐる。マリイとマルタとはたまらなくなつて、

「姉さま、手をかして」

「マルタ！」

と二人は抱き合せて接吻する。

窓を一心に見つめてゐた男は、きつと今戸を叩いたのだ——みんな一度に顔をあげた——お互に顔を見合はせてゐると叫ぶ。斯うして室内の人達のほんの些細の表情が、さながら電流の傳

はる如く室外の人達の胸を顫えさせる。群集は窓の方に進む。マルタとマリーは半ば立ちかける、立上る、それからびつたり寄添ひながら人々の後について窓の方へ行く。老人が室の中へ進んで行くのが見える。

老人は腰をかけた。けれども言ひかねてゐるやうに見える。とうと老人は口を開く、そして其聲は一々みんなの注意を惹いてゐるやうに見える。父親はそれを遮ぎる。老人は再び語り出す、次第々々にみんなが緊張し、心配そうになつてくる。突然に、母親が立上る。母親は心配そうに老人に質ねてゐる様子。老人が二言三言いひ出すと、突然みんなが立上る。

室外に見てゐる人達には勿論何も聞えないのだけれどその動

作は言葉よりも以上のことを告げてくれるやうだ。

室内の方では老人は立ち上つて自分の後の戸を指さす。母親、父親、それから二人の娘も戸の方へ突進する、父親は骨折つて戸を開ける。老人は母親の出て行くのを留めやうとする。

庭の方では群集は動搖を初めて、みんな家の向側の方に急いで行つてしまふ。只見知らぬ男ばかり窓のところに居残る。室の中では戸はとうに開放され、みんな一度に出て行く。

戸の外には星の輝く空が見える、庭も噴水も月光に照されてゐる。たゞ室の中には幼児ばかり平和さうに、膝掛椅子に眠をつゞけてゐるのが室外からもはつきり見える。窓のところに居残されて黙つて此光景を見て居たかの見知らぬ男は、

「幼児はやはり目を醒さない！」  
と云つて此場を出て行く。戯曲室内は之れて終ります。  
私は此戯曲を読んで仕舞つて無明長夜の燈炬なり、智眼くらし  
と悲しむなてふ祖聖の讃頌の一句を想ひ出して暗い夜の旅路を  
手さぐりしながらとぼく歩み行く私のさびしい靈の姿を眺め  
て涙ぐみました。

(附記。之は Richard Hovey 氏の英語譯、秋田雨雀氏の邦語譯に據  
りました。)

### 近代人の産める聖母マリヤの信仰

一  
佛蘭西のコムピエーニユ生れて、バルナビエと稱する貧乏な手  
品師がありました。彼は町から町へと渡り鳥のやうに流れ歩い  
て、人々の集まる四辻かなんぞで藝當をして、僅かな錢で其日々々  
を送つてゐました。

斯んな商賣をするものゝ常として、彼も春や夏の暖い頃は比較  
的金廻りがいゝのですけれど、秋の末に木の葉の落ちかゝる頃か  
ら冬にかけては、さながら蟋蟀のやうに寒さと飢に苦まねばなり  
ませんでした。



けれど彼は、他の人達のやうに人間社會の富の不平均を訴へたり、神の慈悲を呪ふたりすることはなく、どこまでも自分の生活に對して温順でありました。彼には妻がなかつた。そして欲しがりも致しませんでした。若し強ひて彼に難を云つたら、酒を好くこととありました。けれど酒を飲んだからと云つて、決して亂暴を働くなぞと云ふのではありません。至つて好人物でありました。

彼は聖母マリアに大へん深く信仰して、その聖らかな愛の前に跪くことを此上もない尊い嬉しいことと思つてゐました。

「お恵み深いマリア様！神様が私をお召しになるまでは、どうぞ私をお守り下さいませ。そして私が息を引きとつたらどうぞ天

國へ連れて行つて下さいませ。」

彼は教會堂へ參詣する度び毎に、憐うして聖母マリアの像の前に祈念を捧げるのが常でありました。

或る夕方じめ／＼雨の降る中を、彼は首を垂れて、手品の道具を抱へせめて雨を凌ぐ處を見出したいもの、あてどもなく歩いてゐると、彼と同じ方向に歩いてくる坊さんがありました。彼等はまもなく道連れになつて話し合ひました。

バルナビーが自分の商賣が手品師であることや、其日々の生活にさへ困らなければ世の中に之れ程よい商賣はないなどと語つたので、坊さんは鼻の先きで笑ひながら、バルナビーに忠告しま

した。

「言葉と云ふものは氣を付けて云はねばならぬ。此世に何が面白いからと云つて宗教的生活に越すものはない。信仰家は謂はゞ神と聖母と聖徒の讃仰を職業としてゐるわけぢやないか。して見れば坊主の生活は、一つ々きの讃美歌のやうなものだ。」

正直もの、バルナビーは、坊さんの此忠告にハツと胸を打れて、自分の不真摯の言ひ方を懺悔しました。そして彼も亦坊さんのやうに毎日自分の役目を歌つてゐたいと思ひました。殊に彼の一番歸依してゐる聖母マリヤの慈愛を歌ひつゞけたいと思ひました。彼の手品は今では北のソアソンから南のポオツェーに至る迄、六百有餘の村々に隠れもない賞讃の的になつてゐるけれど

も、若し彼がその光榮と燦爛に充ち溢れる坊さんの生活に入るこ  
とが出来ぬものなら、悦んで彼の手品を放棄してもよいと思ひま  
した。彼の胸は尊きものに入り充ちました。彼はひたすらに此  
の望を坊さんに打ちあげました。

手品師のバルナビーが坊さんになつたのは、こんな譯柄からで  
ありました。

### 三

バルナビーの入つた修道院では、皆んながマリヤを崇敬し、マリ  
ヤを讃嘆することに於て一心でありました。

或る坊さんは、その讃嘆を目的として、自分に與へられた知識の  
すべてを絞つて書物を著はし、或る坊さんは密書によつて、或る坊

さんは彫刻によつて、或る坊さんは詩歌によつて、各々が競つて聖母に對する各々の信仰を表白しました。けれど無智無能のバルナビーは聖母の慈愛には感激しながらも、それを如何にして傳へてよいかを知りませんでした。彼は折角嬉しい修道生活に入りながら、再び以前に思ひもかけぬ悲しみに出逢ひました。

或る日此憐れなバルナビーは、修道院の寂しい境内を獨り悲しみに沈んで歩きながら、ハテ、サテと呟きました。「自分は何と云ふ愚かな奴であらう！自分は自分の戀ひこがれる聖母様のお徳を讚嘆したいと思つても、あの人達のやうに讚嘆することが出来なことは、何たる悲しいことであらう。あゝ、自分は無智無能で何一つ知つてゐるものがない。彼の胸には云ひ知れぬ佗しい涙が沁

み出るやうでありました。彼はそのやるせない思ひを聖母に訴へるやうに聖母様！私はあなたの御慈愛を身にしめて有り難いとは感じながら、他人を導く説教や論文を規則通りに作りあげることが出来ません。況して綺麗な畫や眞に迫る彫刻や、歌ひまはる詩歌や、さうしたものは私には出来ません。あゝ、私は何んとした無能な奴でありませう。

彼は斯うして誰に訴へやうもなく、獨りて悲しみました。四  
或る晩のことでありました。静かな修道院の一室で、一日中の勤めを終つた坊さん達は、思ひ／＼の話を物語つてゐる時に、バルナビーは或る敬虔な男の話を

聞きました。その男と云ふのは *Ave Maria* より外に何も知らない男でした。此憐れな男は、斯うした無智無能の爲めに、いつも他人から輕蔑されて居りましたけれど、死んだ後には此男の口の中から、マリヤ (*Maria*) てふ文字を象徴化した五つの薔薇の花が現はれました。斯うして此信心深い男のお救ひが他の人々に明了になりました。

此話を聞いてゐたバルナビは、人知れず抱きしめてゐた日頃の彼の悲しい胸を動しました。そして今更の如く聖母マリヤの慈愛の深いことに驚きました。彼の心は熱情に充ち溢れてゐました。彼はどうかして聖母の慈悲を讃嘆したいと望みました。或る朝彼の胸は何んとも云へぬ嬉しさが込み上げて來たので

急いで彼は禮拜堂へ行つて、只一人で一時間以上も静寂の氣の流れる中に籠つてゐました。それから後は彼は毎日他人の留守を見はからつては禮拜堂へ行くやうになりました。そして他の坊さん達が規則づくめの高等の文藝に費してゐる時間を、彼は一人禮拜堂で送るやうになりました。彼はもはや徒らに悲しみませんでした。

斯うして幾日も幾日も過ぎるうちに、坊さん達はバルナビの態度の變つて來たことに氣付いて、バルナビがどうしてあんなに人目を忍ぶのだらうと、各々が好奇心に驅られて話し合ひました。それで、弟子達を監督しなければならぬ住職は、二人の高弟を引き連れて、バルナビが禮拜堂へ入つた後に彼が一體何をやつ

てゐるかを見る爲めに、戸口の隙間から覗いて見ました。バルナビーは聖母の祭壇の前で、昔評判を取つたすばらしい藝當を一心不亂に演じて居りました。單純率直なバルナビーの考へては、彼には自分の知つてゐる唯一の知識と熱練とを以て斯うして手品をすることが、聖母マリヤに捧げる唯一の報恩行でありました。彼はそれによつて聖母マリヤの慈愛を益々深く感ずるやうになつてゐたのですが、他の坊さん達にはバルナビーの胸の中が解らぬものですから、只此外面的な有様のみを眺めて、彼は神を瀆すものであると思ひました。然し多少なりとも常にバルナビーの率直を知つて居た住職だけは、彼を直ちに瀆神罪に訴へやうとは致しませんでした。が、それでも彼を氣の狂つたことゝ結論

しました。そして彼等が、バルナビーを直ちに禮拜堂から連れ出さうとしてゐる時、不思議にも聖母マリヤが祭壇を降つて、衣の端で、バルナビーの額から流れる汗を拭き取つてやるのを見ました。住職は驚いて石壇の上にひれ伏して、心の貧しきものは幸なるかな。彼等は神を見るべければなりと云ひました。そして他の弟子は「アイメン」と呼びました。

——此物語は、アナトール、フランスの小品、マリヤの手品師の概要であります。

## 五。

どの宗派の妙好人傳を見ても、之れに類した話が無いでは有りませんが、特に此物語に對して興味を感じたのは、自然主義的信仰

によつては到底人間の眞實に觸れることの出来ないことを知り始めた佛蘭西の文壇の人々が、嘆き悲しみのあまり新教よりもむしろ舊教を悦び、その舊教も中世期時代のもの特に聖母マリヤの信仰に撞かれたと云ふこととあります。

近世の科學萬能思想……自然主義……と云ふ風に考へて來ると誰の胸にも浮ぶのは偶像破壊てふ言葉であります。即ち舊習を破壊して人間としての自覺に入るてふ宣言であります。此思想の波を一番手ひどく受けねばならなかつたのは宗教界であつて、舊信仰破壊とか自由主義的信仰とかさう云つた個人の眼覺めの聲が僧侶獨占の會堂的宗教を生々した平民の胸に移さうとしました。即ち儀式的宗教を脱して直ちに宗教そのもの、本質に各

々自由に突進せんとすることとあります。それは雄々しい、力強い、尊い聲でありました。……  
けれど此尊い聲が、果して豫期した如く尊い人間の眞實を掴み得たてあらうか。その尊い第一の宣言が、果して偶像を破壊したてあらうか。始めて眼覺めの聲を揚げた人々は尊いものであつたにちがひないが、其後續々として現はれた所謂偶像破壊主義は、偶像破壊の名のもとに尊い眞實までも共に破壊しなかつたのであらうか。又偶像を破壊せりと稱しながら他の偶像をいつかしら建てゝ居るのではなからうか。……  
「あゝ、破壊後のさびしさ……」  
斯うした聲が、又處々方々に起りました。秋風の過ぎ去つた後



六

さきに「秋の歌」に於て落漠たる胸の悲しみを訴へた詩人ツエル  
 レトヌは、遂ひにほの暗き静寂の香の流るゝ舊教の會堂を戀ひ慕  
 ひ、聖母マリヤによつてあらはさるゝ純潔な光りに憧れて、  
 こゝにわがうら恥かしき額あり、  
 慕はしき爾が足に跪くべく、  
 こゝにわがうら恥かしき額あり、  
 と歌ひ、更に涙をのんで、  
 こゝにわが厭しき虚偽の聲はあり、  
 凡人懺悔の壇に近づくべく、  
 こゝにわが厭しき虚偽の聲はあり、

と飽くことなき肉の生活の恥かしさ、罪の生涯の懺悔に堪へかね  
 て、暗き牢獄の中からひたすら慈愛の柔かき胸に抱かれんことを  
 祈りました。「わが聖母マリヤのほかに吾は愛せじ、そのほかの愛  
 はたゞ吾に強ゆるのみ、わが覓むるはたゞひとつわが聖母のみ、親  
 しき胸の焔を抱く聖母のみ。」  
 彼は斯うして、子供が母親を戀ひ慕ふ如く、痛ましい胸の疵を癒  
 すべく聖母の大きな愛を戀ひ慕ひましたけれども、果して彼等は  
 中世のカソリック教徒の如く、全く現實生活を忘れ果てゝ、ひたす  
 ら純潔な夢見る様な空氣の中にいつまで酔うてゐることが出来  
 たであらうか。彼等の生活が直ちに一續きの讚美歌のやうなも  
 のになることが出来たであらうか。彼等は「手品師バルナビー」の



やうな純朴なる信仰を讚美する。天國の燦爛を憧れ、聖母マリヤの慈愛に酔ひたいと思つてゐる。けれど彼等の肉の生活はあまりに執念深く彼等の跡を追ひかけるではないか。中こゝに靈と肉との戦、水火二河の喩が首を出さずにゐません。肉のみを追はんとする機械的文明に眞實の生明がない如く、肉より切り離した靈のみを追はんとする舊教復活主義にも全き生命が有りません。共に部分的人生觀であつて、全き自己の救済は得られません。即ちその神は眞如法性の如來てはなしに、一種の化佛であり、その天國は眞實報土ではなしに一種の化土であると思ひます。

## 七

アナトール、フランスは更に小品ゲヌタスによつて當時のマリヤ信仰の内面を語つてゐます。然もそのゲヌタスは詩人ゲエルレイヌをモデルにしたものと稱せられて居りますから尙ほ更ら私共に興味を與へます。ゲヌタスは世界に隠れない大詩人であるにも係はらず巴里の貧乏町にあるみすぼらしいホテルの一室を借りうけて生活をして居りました。それは彼がその界限の貧乏町をひどく愛してゐたからで、とりわけて之等の狭い横町の一つで、居酒屋の並んでゐる處が彼の氣に入りました。と云ふのはそれ等の家々の一隅に、酒臺の背後の青い壁龕の中に聖母マリヤの御像が祭られてゐるからであります。

彼は夜が明けるや否や、蹴られて起された宿無し犬のやうに身慄ひしながら、ホテルの長い螺旋状の梯子段を急いで降り、そして悪に對して極めて寛大なる貧乏町の人々を眺めて微笑みながら二十年來の彼の放浪の友なる女真樹の杖に縋つて歩き出します。朝の間、彼は全く單純な、全く幸福者のやうでありました。そして彼は職工共と一緒に白葡萄酒を飲み、酒場の軒から軒へと歩み廻ります。

春の或る朝のことでした。ゲスタスは例の通りのそりのそりと出かけて或る居酒屋へ這入りました。そこには職人の一群が各々の國自慢の話をしながら盃のやりとりをして居ました。彼も早速その愉快の一群に身を投じて飲み始めましたが、職人共は

いつかしら一人々々仕事場へ出かけて行つて彼は最後に一人残されました。彼は又隣りの酒場へ行つて新たな一群と共に飲みかわし、それが終ると又三番目四目番の酒場へと云ふ風に飲みまわりました。

斯うして彼が一つ一つの酒場を訪れる毎に、彼の胸はだんだん荒んで來ます。そして朝の平安と満足とが何處へか消え失せて得も知れぬ悲哀の涙が込みあげて來ます。彼は死にたい程悲しくなり、彼自身に對する憎惡の念が湧き上りました。そして後悔と羞恥の聲が彼の胸の底から、豚だ、豚だ、貴様は何と云ふ豚だ、と呼び立てます。彼も彼自身の口で、豚だ、豚だ、貴様は何と云ふ豚だ！と幾度も繰返へします。そのうちに段々其聲が明かな怒りの聲

となり、莊嚴な天使の聲のやうになつて聞えます。そして彼の胸中に無邪氣と純潔とを熱求する憧憬が勃然として溢れて來ます。彼は泣きます。大粒な涙が彼の山羊のやうな鬚の上へポタリポタリと落ち掛ります。「おう神よ、もう一度嘗て私が遭つたやうな小さい子供にならせて下さい。彼はこの單純な祈りを捧げて彼の飲んだくれから生れる猥褻な浮氣の上に慚愧の涙をそそぎます。そしていつか教會の門前に立つてゐました。」

それは古びた教會堂であります。その石の組細工は嘗ては白く美しかつたにちがひないが、時と人の手はそれをみじめに傷付けて仕舞ひました。今ではその美は只想像に豊かな詩人の胸にのみ訴へるだけであります。ゲヌタスは此神の家へ這入ります。

彼は慘苦に燃ゆる思を抱きしめて圓天井が投げ出す涼しい濕ぼい影の中を進みます。やがて此古びた靜寂の中に微笑んでゐるやうな聖母マリヤの像を眺めるや、彼は其の硬張つた年寄つた足を曲げ、聖ペテロのやうな涙を流し、そして優しい途切れ／＼の言葉で「聖き處女よ、母よ、マリヤよ、私はあなたの子です、あなたの子です、母様よ」と獻歎きます。けれど再び彼は急いで立ちあがり懺悔所の方へ行きます。椗で組みあげられた懺悔所は古いリンネル張の食器戸棚のやうなキッチンとした質素な親しみ易い様子で立つてゐます。彼の焦立つ胸の苦しみは懐しい靜寂に溶けてしつとり致します。彼はそこで信心深い人達のするやうに膝を突いて、そして懺悔を密かに聽いてくれる和尚さんが傍に立ててもゐ

るやうに思つて、和尚さん、和尚さん」とひそ／＼聲てよびます。「和尚さん、どうぞ聽いて下さい。私は懺悔をしなければならぬのです。私は魂を浄めねばならないのです。それはくろく汚いのです。それは私の胸をムカ／＼させる程、厭なのです。和尚さん早く悔改めの洗浴、宥恕の洗浴をお願ひ致します。私の不純の事を思ふと、私の心は口へ出て來ます。そして私は私の不潔の厭さに吐きそうになります、どうぞ洗浴を！きよめの洗浴を。」

八

聖母マリヤの信仰を求め、ゲスタスの氣持ちは、穢ない内の生涯を切り離して、只純潔な靈の生活のみを愛戀することである。夜の世界を捨て、晝の世界のみに生きたいことである。五色の

雲の中に歌舞を夢見る天女の生活を求めることである。けれど斯うした生活が果して地上の人間に望むことが出來やうか。

宗教の眞生命は、拔苦與樂にあります。けれどゲスタスの求め、聖母マリヤの信仰は、果して苦惱の人生からその苦惱を抜き取つて安樂を與へることが出來るでせうか。それは苦痛を一時忘れさすことは出來るでありません。それは酒に酔うた時のやうな快樂、魔睡劑を飲んだ時のやうな平靜を一時の間は得ることが出來やうとも、その快樂、その平靜は表面から塗られた白粉のやうなものではありません。やがてはハゲルにちがひない。醒めるにちがひない。そして此一時的な夢幻の歡樂は却つて悲痛の度合を強めるにちがひありません。それは決して眞實の拔苦與樂では

ありません。永遠の生命を生命とし、無碍の光りを身に浴びる眞實の信仰は得られません。

蓋し酔を求め、魔睡を求めることは近代人の一の特徴であります。それは一時でもよいから現實の悲惨を忘れたいからであつて、悲惨であればある程之れを望むやうになるのであります。従つて現實を思ひ出させるやうな總べてから逃避して遠き世のマリア信仰を夢見ること、只現實の苦痛から逃れたいからであります。殊に舊教會堂の神秘的な色彩や、此世間離れした静寂が常に異常なものを戀ひ慕ふ近代人の胸を満足せしむることが出来たのであります。

ゲスタスの場合はどうであつたらうか。彼は酒池肉林の歡樂

に痛しくも疵付けられて、苦痛に堪へかねて教會堂に走り込んだ。彼はその苦痛を忘れたいたのである。そしてたとへ一時でもその教會堂は彼を遠い世に連れて行つた。彼は石の組細工を眺めて今では年月と人の手によつて傷付けられて居るけれど嘗ては白く美しかつたらうと想像する。彼はその上に自分の現今の生活を想ひ出す。そして子供の頃の純潔な心に憧憬れて、悲しい涙の中からも一種の快感を味つてゐる。又彼は白く塗られた壁を眺める。そしてそこに描かれてゐた樂園の繪を見ては琴の音が聞えてくるやうに想像したり、又は罪人が火責めの苦みを受けてゐる地獄の繪に神秘的な魂を想像する。或はまた古い濕っぽい影の中には、色ガラスの高い窓からしのんでも來るやうな光線が溶け込

んで来て此世ならぬ静寂境を想像させる。聖母の像の前には鐵の金字塔形が尖つた齒を示し、信心の供物として掛けてある小さい金銀の心臓形のもの、中からは白と淡紅色と青との三色で彩られた肖像が微笑んでゐる。更に懺悔堂へ行くならば、その羽目板の上には貝細工のやうな菱形と田舎風の細工とで宗教の表徴が彫刻されてある。彼はそれを見て、昔町の女達が、レースによつて飾られた帽子を被つて静かに頭を下げ、穢れに充ちた魂を洗ひ淨めに來た容子が思ひ浮べられる。

ゲスタスが斯うした空氣の中に眼を閉ぢてゐると、いつしか焦立つ心が溶けてゆたかに流れるやうに思はれる。彼はそこから宥恕や平和や慰めや健康や無罪や神と彼との調和や天國の喜び

や、神の愛に對する服従やが迷り出るやうに思ふ。けれど彼の頭に畫く神は彼の煩惱を満足させるやうに彼自身が想像して造り出した偶像の神であつて、眞如より來生する如來では有りません。従つて彼はその神によつて救はれることは出來ません。ですから、ゲスタスの戀ひ慕うた聖母マリヤの信仰は、眞實の宗教信仰ではないのであります。

九  
ゲスタスが和尚さん、長老さんと呼ぶ聲が、園内を掃除してゐる役僧の耳に這入りました。そして役僧が「今は懺悔をする時間ではない」と云つて追ひ出そうとするとゲスタスは、えへ、では君は僕の罪の宥しを得させずに死なせようと云ふんだね」と詰問しやうと

するが、又哀願するもののやうに

「どんな小さな坊さんでも好いんだぜ。僕の腕の長さより丈の高くないどんな小さな和尚さんに僕が懺悔をしたとて、ちつとも君に迷惑はなからうぢやないか。僕の懺悔を是非聴きに來るやうにと何の和尚さんにも宜いから傳へてくれ給へ。僕は其人に珍らしい素敵な面白い罪の塊を告白しようと思つてゐるんだ。僕の懺悔はこゝらのお饒舌の鼻共が彼の前に打ちまけること出来るやうな懺悔とは性質が違ふんだ。實に面白い懺悔を仕度がつてゐると云つて呉れ」

と云ひます。番僧は怒つて彼を戸の外へ突き出しました。ゲスタスはまた大通横町路地と云ふやうに處々方々をさまよひ歩き

ながら酒場を見出して飛び込み、此憐れな懺悔者は強烈なアブサントを飲んで苦痛を忘れやうと致します。けれど後悔は後から後から湧き上つて、彼を益々苦しめます。彼は子供のやうにポロポロと涙を流して泣きます。

アナトール、フランスの意見であるか、どうか、それは解りませんが、けれど、此單篇の後、ゲスタスの信仰を批評して、彼は單純な、確乎した子供のやうな信仰を持つてゐる。彼に缺けた處は、唯實行ばかりである。けれども彼自身は決して絶望してゐないのであるから、他人が彼に就いて決して絶望するに及ばない」と云つてゐます。

さすれば彼等の望むところの聖母マリヤの信仰は、實生活のどん

な断片をも捨てることなき全き生活の救ひとはなりませぬ。釋尊が苦行林の生活を捨てられたのも、親鸞聖人が比叡山を下られたのも、不斷煩惱得涅槃を欣求されたからであります。穢泥を邪魔にして捨てやうとせず、むしろ此悲惨な穢泥を愛しいつくしみ、此底より涅槃常樂の生命の蓮華をほのくと開かしめる宗教こそ眞實人間の救ひであります。

信仰があつても實行が出来ないなどと云つてゐる人達の信仰は、絶對救済を目的とする眞實の宗教信仰ではなしに、只一の規定である。型である。偶像である。それは只一時苦痛を忘れしむる一種のアブザントであり、魔酔劑にすぎませぬ。

## タゴールの「暗室王」

——タゴールより——

### 序

一。暗室とは何を意味するのであらう。只何物も無い、暗い冷たい室と云ふだけなのであらうか。

そうでは無いのです。それは直接私共の眼には見えないけれども、總てのものを生み出す根本で、謂はば渾沌とした静かの室と云ふ意味であります。萬有が、そこにのみ眞實の姿を現はし、薫しく溶けて静かに流れる室であります。即ち、此處で云ふ暗室は、眞如の世界を意味するので、すから暗室王は、眞如の世界



の主人を意味するのです。直接私どもの眼には見えないけれど、共それかと云つて何人も無いとは云はれないのです。恰度心が眼に見えないからとて、直に無いものだと誰も云ひ得ないやうに。

二。私は「暗室王」と云ふ表題を見た時に、直ちに眞如より生れ來たる「如來」を想像いたしました。そして此一篇の劇の中には、如來を採ね求める、幾多の人々がゐるのだらうと思ひました。殊に最近色々の意味に於て世界を驚かした作者タゴール氏の熱烈な求道心が全篇に溢れてゐることだらうと思つて、喜び勇んで此書に向ひました。「我が神よ！何處にいます！」。ああそれは世紀より世紀へかけて幾多の魂が叫んだ痛ましい雄々しい

聲である。その眞實の叫びが、果して此劇曲の一文一文字の中にからみ付いてゐるであらうか。暗室の王が、この人間の叫びの中へ姿を現はしてゐるであらうか。

三。此劇は、スダルシヤナと云ふ王妃の入信の徑路を書いたものですが、私は觀無量壽經にあらはれた王妃韋提希夫人の入信の徑路を想像して殊更興味を感じました。

又觀無量壽經が一篇の思想劇であるやうに、暗室王も思想劇として見るべきものだと思ひます。ですが、筋書だけ味つてもそれ程効果が無いと思ひますから、繁雜のやうではあります。が、私は頁を追うて梗概を述べながら、私自身の感じたことを直ちに書き添へて行かうと思ひます。殊に此劇は、筋書以外の所、

普通のものゝ氣の付かないやうな所に却つて作者の信念があらはれてゐるのなそうですから、なるべく丁寧に見て行きたいと思ひます。

## 第一場

暗室王の國で、大祭を催す日です。恰度其日は、春先きの暖い風が、南の野から、そよ／＼吹いてゐた。

此大祭に就いて、國內の人々は申すに及ばず、他國の人達まで寄せかけた。

數人の外國の旅人が來た。その人達も勿論此大祭を觀に來たのだが、土地不案内の爲めに、何處に大祭が催されるのかその場所が解らない、彼等は此町の哨兵を見出した。

「私共は大祭のある所へ行きたいのですが、何方の道を參つたらよいのでせうか」

「此處ではどの道も同じことだ。眞直に行きさへすればどの道を行つても其處へ行ける」。

旅人達は歩みながら、此哨兵の答に就いて、各々議論し始めた。

一方は、暗室王の國は萬事が開放的で、如何なる他國人をも拒まず、道路と云ふ道路を自由に歩ませることを賞讃し、公開が一國を救ひ、一國を治めるに就いての唯一の信條でなければならぬと主張し、他の人は之れに反對して、開放することは個人に於て最も危険であると同じく、一國を危険にすることだと云ひ、又晝も夜も見ず知らずの人達と一緒に肩を擦り合ふことは、孤獨の楽しみを失ひ、

生活が一つの重荷のやうになると主張す。即ち前者は靈の開放を叫ぶ自由主義者であり、後者は政權傳承の禁足主義者である。此議論の最中へ、此町の或る老人が、少年隊を伴れてやつて来る。「さあ小供等よ、風に負けずに唄へ、俺達の悦びの歌で町の隅々までも溢れさせやうぢやないか」

南の門は開きぬ。來れ、わが春よ、來れ！

汝は我が胸の波うつまゝに打ち顫ふ、來れわが春よ、來れ！

來れ、木の葉のささやきに

花の若き綻びに

歌うたふ笛の音に

思ひに沈む森の吐息に！

汝の自由なる外袍を狂へる風に心ゆくまで翻へさしめよ！

來れ、來れ、わが春よ、來れ！

彼等は、こうして、開放された胸の悦びを歌ひつゝ、若草の野を踊りまはる小羊のやうに、自由の曠野に、常住の春の光のさし添うことを、街から街へ歌ひまはる。

けれど一般市民の顔には不安の雲が掩はれてゐる。彼等の心は深く閉ざされてゐる。彼等は折角暗室王の國に生活を營んで居りながら、今日まで未だ一度も王様を見たことが無いのだ。彼條は心の故郷を探ねながらいつも徒らなるさすらひの悲しみを悲しまずにはゐられない。彼等は疲れた額をあつめて、「王はどこにゐるのだらう、王はなぜ顔を見せないのだらう」と話す。

或者は云ふ。「王様は恐しい顔をしてゐるのだらう。それで市民に自分の姿を見せまいとしてゐるのにちがひない」と。或者は之れを不敬漢だと云つて怒號する。けれど誰も見ないのだから仕方がない。

此度の祭禮には、近國の人々は勿論、各國の王様達も來た。けれど「暗室王」は、誰にも顔をあはさない。各國の人達は、市民に訊ねる「すべてのことは好く整つて立派に出來てゐるが、全體君の國の王様は何處にゐるのだ」。

市民はどう答へてよいか解らない。王の居ない筈はないけれど何處に居るとはつきり云ふことが出來ない。各國人は此もど

かしさを嘲笑する。

例の開放された老人は、此國は國中が王を以て滿されてゐるのだ。吾等の王はすべての人達に王の冠を戴けるやうにして下すつたのだ」と答へるけれど、誰も老人の言葉を信じない。彼等は「これこそ吾等の王だ」と云ふやうに自分達の肉の眼にマザマザと見える人間の王が見たいのだ。またそれよりほかに「王」を考へることが出來ないのだ。然し老人は獨りて唱ふ。

吾等はすべてわが國の王なり、

もし然らずば、吾等は如何にして我心の中に彼に逢ふ希望を有すべきや……

吾等の王は吾等一人々々を厚く優待し、かくして彼自らを嵩

む

いと小さきものの、吾等を永久に不真理の壁に閉ぢ込むことなし

もし然らずば、吾等は如何にしてわが心の中に彼に逢ふ希望を有すべきや

吾等は力を盡してわが自らの道を掘り、かくて最後に彼の道に達す。

吾等は暗き深淵の中に吾等自らを失ふことなし。

もし然らずば、吾等は如何にしてわが心の中に彼に逢ふ希望を有すべきや

老哲人が斯く歌ふけれ共、人々には其意味が解らない。また耳

を貸そうともしない。王に對する無稽の讒謗が盛に起る。老哲人は云ふ。「世界のすべての人達が太陽を吹いた所で、太陽の光を暗くすることも出来ないし、傷つけることも出来ない」とか、あの男共が王を醜くいものに見てゐるのはあたりまへの事だ。なぜなれば彼は自分の醜くい姿を鏡に映した後で自分の王の姿を考へるからだとか、彼は王の醜さを歌つてそれで自分の祭りをするつもりなのだ氣の毒のものだ」と。

外國から來た旅人は二派に別れて議論する。

一方は此國には確かに王はゐないのだが、それをゐるやうに偽つてゐるのだと云ふ。他は之れに反して、街中が之れ程整頓して秩序の正しいところを見ると、王がゐないとは思はれぬと云ふ。

かうして彼等の有無を論じ、或は王の有無に關せず、立派の生活が出来ぬものなど云ひ合ふ。一方は宗教無用論者であり、一方は宗教有用論者である。けれど兩方ともその立論が只形骸の上に止まつてゐて、中心から叫ばるゝ問題にならない。恰度政治家や教育者などが、宗教を加味しやうか、しまいかなどと、議論してゐると同じことである。そしてかうしたものはいつも自分自身の問題を他處に置いてゐるものだ。

こゝへ市民の一隊が、敬虔の歌をうたひつゝ入つて来る。わが愛人は永久にわが心のうちに住む。さればわれは何處にても彼を見るなり。彼はわが眼の瞳のうちに住む。

さればわれは何處にても彼を見るなり。わが愛人は永久にわが心のうちに住む。されど、あゝ、それは空しかりき。わが愛人が歸り來りし時、われは彼の聲を聞きぬ。わが自らの歌のうちに彼の聲を聞きぬ。物乞ひの如くに戸毎々々に彼を探し求むる汝は、そも誰ぞや。わが心に来れ、而してわが眼の涙のうちに彼の顔を見よ！この歌が終るか終らないうちに、退け！道をあけろう！と云ふものゝ、しい聲が聞こえる。輝かしい真紅のキムシユクの花のついた旗が、春風になびく。

「王様のお通りだ！」と、王の使者と王の前衛が叫ぶ市民は驚き且つ疑ふ。一人の市民は云ふ。「あんなに町を驚かすやうな騒しい太鼓を打つて、澤山の旗を押し立て、町を練り歩くやうな王は決して眞實の王ではない。俺は今迄幾度となくあんな賸物の王のさらびやかさに瞞されて、澤山の贈物をした。そして赤貧になつたのもそれだ。けれど何等の恵みを受けたことがない。俺は之れが運命なのだ」とあきらめてゐる。そのかわり、それ以來どんな眞實らしい王が來ても、俺は潔白の自信を以て決して瞞されない。けれど今度は眞實の王か知らん。いや、決してそんなことは無い筈だ。」

他の一人は云ふ。「俺の信仰は只王に従うと云ふことだ。眞實

の王であろうが虚偽の王であろうが構はない。もしそれが眞實の王であれば尙更好し、もしそうで無くとも、それがどんな災を起すものか」

璨然とした蠟人形のやうな王が來る。群集は狂亂の如く此王の身邊に集つて、各々自分勝手の祈願をかける。王は、お前達の忠義と敬信とを限りなく喜ぶなど、良い加減のことを云つて出て行く。その後へ老哲人が來る。

「わしの王が蠟人形、そしてお前達がそれを庇ふてゐる。なんと云ふ馬鹿なことであらう。そのやうなことが屹度すべてのことを疑はすやうになるのだ。街を通る時に、こんな大騒ぎをするものは王ではない。わしの王は風見のやうな裝飾や氣紛れ半分の

心を愛しはなさらぬ。わしの王は使者も、兵隊も、従者も、音楽隊も、又學者も伴れられてはゐない。王は人民の一人だ、だから普通の平民に混つて一緒にゐられる。王の旗の記號はキムシユクの花ではない蓮の中に稻妻の記號が書いてあるのぢや、……乞食で王を知る者は一人もない。小さな乞食の眼には大きな乞食が王に見えるものだ。お前達から歓迎を受けんが爲めに、深紅色と黄金とで飾り立て、今日出て來たあの王は、あれは大馬鹿ものだ。その大馬鹿ものをお前達は王として吹聴してゐるのだらう！

群集は常に眞實らしいものに酔うけれども、この老哲人は眞實そのものを求めてゐた。化佛の華かさてはなくて、眞實、人類の惱を救はんとする眞實絶対の如來を求めてゐる。蓮の花は高原に

咲かない。泥深い平原、即ちありのまゝの人類の胸から生ずる。煩惱を断ち切つた清淨の胸に涅槃の花が咲くのでない。不斷煩惱得涅槃である。この涅槃の象徴なる一輪の蓮は火焰を吹き上げる。この火焰こそ、神火である。靈肉合一の輝きである。如より來生せる如來である。

老人の云ふことは群集にわからない。老人は又強いて群集と争はうとはしない。

そこへ老人の友達で、道を求むることあまり眞剣で、つひ些か氣の狂うた人々が來る。老人は嬉しそうな胸をひろげて、あゝ、あすこにわしの氣の狂うた友達が來た！あゝ、わが兄弟達よ！わし達は拙らないことを言ひ争つて大切の日を過してはゐられない……



……あの狂氣のやうに、思ふがまゝに愉快に遊び、愉快に歌はう  
！と叫ぶ。氣の狂うた友達は、歌ひながら入り来る。  
わが友よ、汝等は微笑むや。わが兄弟よ、汝等は笑ふや。われ  
は黄金の牝牛を尋ねて彷徨ひ歩く！ああ。さなり、疾足の  
幻影は永久にわれを去れり！……  
されどわれ例ひこの世に黄金の牝牛を捕ふ能はずとも、われ  
はそを尋ねて彷徨ひあるくなり。……  
汝等はすべて市場に行きて買ひ求め、品物と糧秣を積みて汝  
が家に歸へり行かん。されど限りなき空飛ぶ野風は來りて  
われに觸れ、わが唇に接吻しぬ。お、されどわれはその何時  
何處より來りしかを知らず！……

わが心の笑ひと歌もて、われはすべての悲哀と苦痛とをわが  
後に棄てぬ。お、われは漂浪者の如く森を抜け、畑を横切り  
名もなき國を彷徨ひ歩かん

かくて第一場は終ります。第一場はこの廣い世界の中に靈を  
求めんとする者のさまざまの姿を書いたものです。けれど  
總べてが根本問題にしつかりと觸れてゐません。それは第一場  
が此劇の序曲とも見るべきものだからでせう。此劇の女人公な  
る王妃スダルシャナは第二場以後にあらはれるのです。

## 第二場

ともしび、ともしび！ともしびは何處にあるかい！此部屋では  
灯は點けられないのかい？

斯うした恐しい神秘の疑問によつて第二場は開かれる。此言葉を聞くものは何人と雖、此場面がどう變化してゆくかに胸の高唸りを禁じ得ないだらう。それは單に戯曲中の言葉でない。「暗室」を抱いてゐる人々の切ない叫びであるから。

場面は宮廷内の暗室である。そこにスダルシヤナと名付けられる王妃と、スランガマと呼ばれる侍女とが對座してゐる。王妃はすべてが神秘に怪しげに思はれる此恐しい暗室の中にあることは堪へられない、遂ひに王妃は「ともしび、ともしび！」と侍女に向つて叫び出したのである。

スダルシヤナは暗室王の王妃ではあるけれども、あの多くの市民達のやうに、まだ一度だつて王の顔を見たことがない。丁度あ

る宗門の中にある尊い僧侶の身分でありながら自分の魂の親の聲さへ聞いたことのないものゝやうに、けれど侍女のスランガマは、卑しい下婢の身ながら、自由に「暗室王」と話し合うことの出来る信者である。作者タゴール氏は此信者と未信者との心の間隙をどんなに取り扱つて行くであらう。

王妃………ねえ、全體この部屋は宮廷の何處にあるのかい。妾には入口も出口も判らない」

侍女「この部屋はずつと下の地の中にあるので御座います。王様があなたの爲めに特に此部屋を御作りになつたので御座います」

王妃「でも、部屋が足りなくはないのだらう………それに何の必

要があつてわざ／＼妾の爲めにこんな暗い部室をお作りになつたのかい」

侍女あなたは明い部室で他のお方にお逢ひになるので御座います。そしてこの暗い部室では唯王様にのみお逢ひになるので御座います」

王に逢ふ爲めには此暗い静かな部室でなければならぬことを侍女は云ふ。暗い心！地下幾尺に埋れる眞實の吾等の魂を静視し黙想するものでなくて、どうして神の聲に接することが出来得やう。信者の眼から見れば、この恐しい怪しい胸の奥底こそ、却つて神に逢ふべき尊い靈場である、靈場は決して人巧的の華麗な祭壇や内陣でない。けれど王妃にはそれが解らない。王妃は云ふ。

「否、否、私はともしびがなくてはゐられない。こんな息の詰る暗い部室にぢつとしてゐることは出来ない。スランガマよ、もしお前がこの部室にともしびを持つて来てくれるなら妾はこの頸飾をお前にあげるよ。」

侍女は當惑して王妃様、それは妾の力の及ばないことで御座います……と答へる。王妃にはそれが、侍女が王に入らざる忠義だてでもするやうに思はれる。なぜなれば侍女の父親はかつて罪を受けて殺されたことがある。侍女はこの事に就いて必らず王を呪ひ、此世を恨む筈である。王妃は此事を思ひ浮べて、王に對する不思議の忠義だてをあやしんで、王様がお前のお父さんを流罪になすつた時、お前はあさへつけられるやうな苦しみを感ずは

しなかつたかい？」と訊く。此王妃の質問が糸口となつて、はからずも侍女はその當時を回想して入信の経路を述べる。

彼女の父親の殺された當時、彼女は全く狂氣のやうになつた。彼女は道の上に倒れて、その身を打碎いて死んでしまふとまで思つた。その時恰度行くべき道を塞がれて唯一人何の助けも支へもなく取残されたやうに思つた。彼女は檻の中の野獸のやうに猛り狂うた。そして弱々しい女の力も考へずに、彼女はどんなにすべての人々をずた／＼に引裂いてしまひたく思つたであらう！

けれどそれ程までに狂暴を極めて荒れに荒れて居つた彼女の心が、どうしてその國の王に仕へるやうになつたか、しかもその捧

仕は、いや／＼ながらではない。彼女は今では身も心も一切捧げて、そしてその捧げることの上に此上もない歡喜と満足と平和とを見出してゐる。彼女にはその理由はわからない。多分それは王様があまり酷く無情むねたくしたから却つて王に頼るやうな心になつたのかも知れない。しかしそれは彼女には明瞭に解らないことだ。

王妃はこの話を聞いて更にあやしまずにはゐられなかつた。

「何時そんなに心が變つたのかい」

「何時と云つてそれは話も出来ません。……私自身も判ら

ないので御座います。間もなく私のうちにある謀反がすつかり打碎かれました。そして私の心は謙へりくだつてすべての謀反をすて、

地の塵に頭を下げました。その時私は見ました……私は王様が他に類のないほど、恐しく美しく、いらつしやるのを見ました。あゝ、私は助けられたのです。私は救はれたので御座います。

王妃は侍女の此答を聞いて胸を轟かした。侍女は萬人の見たことのない「王」を見たのだ。其王は非常に美しい王である。その王によつて侍女は助けられ救はれたのだ。侍女はなんと云ふ仕合せものであらう。それに引きかへて、王妃はまた何んとした不幸の身の上であらう。自分の夫、自分の戀人の話を他の人から聞かねばならぬのだ。そのことが眞正のことであるか、虚偽のことであるかの判断さへすることが出来ないのだ。王妃は悲しみに

充ちた聲で切ない胸を語る。

「ねえスランガマや。お願いだから聞かせておくれ。王様はどんなお姿をしていらしたかい？王様の姿を私は唯の一目も見ただことはないのだよ。王様は暗の中に入らして又暗の中に出て行かれた。私はどんなに多くの人々に尋ねて見たらう。けれども皆不得要領な、曖昧な返事をして行つてしまつた。私には皆のものがすべてのことを隠してゐるやうに思はれるよ」

絶対の神のお姿がどんなであるか、その美しさがどんなであるかと云ふことは、たとへその神に接した人と雖どうして告げることが出来やうぞ。殊更隠して告げないのではない。曖昧だから告げないのではない。告げやうとして告げることの出来ないよ

ころに眞實がある、侍女は答へる。

「王妃様本統のことを申し上げますれば、私はどんなだと申し上げて好いか好く判らないので御座います。否、王様は普通の人の云ふ立派なお方では御座いません。普通に云ふ美しい位ではどうしてあの方を云ひあらはせませう。」

「お前の云ふ言葉もやはり皆曖昧な、不得要領だね。私にはお前の云ふ意味が判らない。……私は王様のことについて、お前の語るのを聞きたいのだけれど……お前の云ふことは少しも判らない。併し私はどうしても王様を見なければならぬ。……そのお方を見ずにこのまゝ此處に坐つてゐられやうぞ」と、王妃は堅い決心を洩らす。

その時遠くから微風の吹きよせるやうな、かすかな、かすかな囁きがきこえてくる。それは薫<sup>か</sup>はしい純真な心を持つものゝほかに聞くことの出来ない靈の囁きである。侍女の胸には此さゝやきの一聲一聲が響き通うて波を打つやうに思はれた。彼女は歡喜の聲をあげて「扉が開かれました……王様がいらつしやいます。王様が這入つていらつしやいます」と叫ぶ。王妃にはその微風、その柔らかに充ちあふれる薫り、その神秘のささやきは聞こえない。「どうして王様が這入つていらつしやるのがお前に判るかい。」

「妾にはお話申しあげることには出来ません。でも妾にはあの足音が心の中に聞こえるやうに思はれます。王様のお使としてこの暗室にお使ひしてゐる爲めに、こんなに妾の感じが發達したの



暗の中にぞ溶けぬるかな。

おん身の扉を開けよ。われは待つなり。

歌は終り、餘韻は遙かに流れて消えた。けれど待たる、王は這入つて来ない。

スランガマはたまらずに聲を放つ。「お、王様！あなたのお這りになる扉を誰が閉づるやうなことをいたしませう。錠はをりてはをりません。門もかゝつてはをりません。その扉はたゞ一寸指でお觸れになれば開きます。あなたはお觸りにはならないので御座いますか。私が行つて扉を開けて差上げねばお這入りにならないので御座いますか。」

再び扉の外から歌がきこえて来る。

わが主よ君はたゞ一息にてわがペールを動かし給ふ！もしわれ塵の上に眠りて君のお召しを聞かざば君はわが醒むるまでわれを待ち給ふや。

君がみ車の轍の轟きは大地を震はし能はざるか。

君は扉を打破りて招かれざる君自らの家に入る能はざるか。

あの聲を聞かうとするには是非自分の心の扉を開かねばならぬ。扉を開くことをせずには只待つてゐてもいつまでも其聲は聞かれぬ。私はこの事についてメーテルリンクの言葉を思ひ出す。メーテルリンクは斯う云つてゐる。「あゝ、實際我々の生活の多くは待つことのみで費される。それは神の聲を聞かんが爲めに遠き旅に出かけた盲人の話に似通うてゐる。それ等の盲人共は



神社の階段に腰をおろしてゐた。そして彼等盲人共は何をしてゐるのかと訊かれた時に、私達は待つてゐると、頭を揺りながら答へた。けれども神様は一言も物を言はれない。然し盲人共は神社の銅の扉が閉ざされてゐるのを知らなかつた。そして彼等はその堂内には神の御聲で鳴り渡つてゐることを知らなかつた。神は一瞬間たりとも物言ふことを止められない。けれども何人もその扉を開くことを考へない。併し少し注意しさへすれば神が吾々のあらゆる行爲について必らず話された言葉を聴くことは、それほど困難のことではない。

タゴール氏が印度に於けるメーテルリンクであると呼ばれるのは、斯うした細微のところにて、その思想が似通うてゐるから

であらう。讀者はまたかの親鸞聖人によつて極説された「聞其名號、信心歡喜の一句を思ひ出すことであらうが、吾等は此處に長く論ずることをゆるされてゐない。早く此劇を讀過しなければならぬ。

スランガマは云ふ。「王妃様さあ、お出て遊ばせ。そして王様に扉を開けておあげ遊ばせ。てなければ王様はお這入りにはなりません。けれども王妃の悲しさよ。心の腫の暗い王妃には何もものはつきりと見えない。何處に扉があるのかそれさへも判らない。王妃はお前は此處のことは何でも知つてゐる。私の代りに扉をあけておくれ」と、侍女に向つて切に懇傾しなければならなかつた。スランガマは扉をあけて、王に禮をして暗室から出て行く。

後に王妃は王と話し合ふ。然し王は未だに姿をあらはさない。

「あなたは何故明るい處で目にかゝることをおゆるし下さらないので御座いますか」

「そんなにお前はあの廣い日光に照された澤山な物の中で私に逢ひたいのか！この暗い中でお前に觸れることの出来る唯一つのものが私でない」と云ふのか

「けれ共妾は何うしてもあなたを見なければなりません。妾は久しい間あなたを見たいと思つてをりました」

「お前は私を見てゐることは出来なからう。見てゐればそれはお前に苦痛と、苛酷と、威壓とを與へるばかりだ」

「何故私はあなたを見てゐられないとおつしやるので御座いま

すか？、お、私はこんな暗い中でもあなたがどんなに美しく、どんなに立派な方でいらつしやるかと云ふことがわかります。明るみだと私は何故あなたをおそれるので御座いますか？併し此暗の中であなたは私を御覧になることが出来ますか？」

斯うして王妃は王に訊く。王は出来るかと答へる。それなら何を御覧になりますかと重ねて王妃は訊く。私共は之れからタゴール氏の人間觀を、王と王妃との會話を透して聽くことが出来る。王は云ふ。

「私は、限りない天界の暗が、私の愛の力によつて、生命と實在との中に渦巻き、その暗の中へ無限の星の光を投げ込み、そしてそれが肉と血との形をとつて人間となつて現はれたものをお前の中に

見ることが出来る。そしてその形の中には、幾世紀かを貫いた思想と努力、無限の天空の無言の悲哀、數へも盡きぬ幾年月の涯なき恩恵、量りなき賜物が充ち溢れてゐるのだ！。

かのウパニシャッドが語るやうに、あらゆるものよりも高く、何物よりも高く、その上に世界の無い最高の世界に輝く、尊き無量の光り、無量の生命が溶けて流れて王妃の胸深くに燦爛の渦を巻いてゐるのだ。けれども扉を開くことの出来ない王妃には、それは只不可思議な夢物語でも聞いてゐるやうにしか思へない。彼女は自分の美しさを他人から聞いて驚いてゐる。彼女は、彼女を聞いて居ると、何だか歡樂と誇りとが胸に込みあげて来るやうでもある。嬉しい涙がこぼれさうにもなる。

けれど王妃はふと自分に氣付いた。自分を思つて見た。彼女は痛ましくも光りなき穢き自分の姿よりほかに何も見る事が出来ない。どうして王の話して聞かせるやうな驚くべきことが信ぜられやう。私自身のうちにもそのやうなものを見ることは出来ません！と、王妃は訴へる。それはお前自身の鏡がそれを反射させないのだ。お前の鏡がお前を小さくし、お前を制限し、お前を小さな拙らないもの、様にしてしまふのだ。けれどもお前が、私の心の中に映つたお前と云ふ者を見るなら、それはどんなに立派に見えるだらう！私の心の中ではお前は最早お前が考へてゐるやうな日常茶飯時の小さな個

人ではない。お前は全く私の第二の自我なのだ。  
「お、あなたの眼でどんなに見えるか一寸私に見せて下さいませ、あなたには暗いと云ふことは少しもないので御座いますか。このことを考へますと私は怖くて堪りません。この闇は私には死のやうに眞實な強いもので御座います。……それがあなたには何んでもないので御座いますか。もしそうであればこんな場所へ私達二人の間にどうして調和がありませんか。いえ、それはとても出来ないことです。私達二人の間には一つの柵が御座います。こゝではなく、いえ、あすこでも御座いません。私は樹の見える處、動物の見えるところ、鳥や石やそしてあの大地の見える處であなたを見たいので御座います……」

「よろしい。それなら私を見つけるやうにしてごらん下さい。……けれど誰もお前に教へはしないよ。もしお前が自分で見つけることが出来るなら、見つけてごらんよ。しかし若し人がお前に私を教へても、それが眞實のことを話してゐるかゝらないかを、お前はどうして確かめるのかい？」

「屹度見わけます。幾百萬人の人の中からも見わけます。」

「よろしい。それでは今夜、満月の光りを浴びる宮殿の高い塔から、お祭りの群集の中にある私を見出したらよからう。  
と、王は答へる。そこへ侍女スランガマが這入つて来る。」

侍女は、王妃が今夜自分の眼で王を見出すと云つてゐることを王から聞いて、少なからず驚く。どこで王を見出すつもりだらう

と、怪しみながら王に訊ねる。

「それは音楽が最高の調べを奏てる處、空氣が花の香に重くなる處………白銀がほの／＼と輝やく快い幽暗の並樹のなかで」

「闇と光りがチラツク處で何が見えませう。そこには風が絶間なく吹き荒れて、すべてのものが躍り狂ひます。そんなどころでは眼がチラツキはいたしませんか」

「妃は物好に私を探し出したがつてゐるのぢや」

と、王の話すのを聞いて、王妃の好奇心は再び元の處に空しく涙を流して歸つてくるだらうと、主人おもひの侍女は悲しむ。そこへ悲しい歌が響いてくる。

あはれ、彼等は飛び去らん

休むひまなき漂泊の

人の眼よ、森の小鳥よ！

されど彼等の信順は

いつの日にかは歸へり來ん………

あはれ、小鳥は野の涯に歸り行くなり。

此歌が消え行くと共に第二場は夢みるごとくに終りを告げる。

「暗室」は寂として聲はない。侍女もゐない。王もゐない。只永遠に憧れ、永遠に求めゆく作者タゴールの魂の神秘の囁きが微かに／＼聞こえるやうに思はれる。そしてそれがまた人類の魂の囁きのやうにも思はれる。

卵の殻はいつかは破れねばならぬ。雛鳥はいつかは光輝燦爛

の世界に生れ出ねばならぬ。タゴール氏は歌つてゐる——私は  
ぢつとしては居られませぬ。私は遠い遙けさを待ち望んでゐま  
す。私の魂はかすかの裳裾に觸れやうとしてそのなかへ抜け  
て行きます。お、遙かなる無限のものよ！お、あなたの鋭き呼  
び聲よ！——

## 第三場

どんなに寂しい思ひが胸の奥深くに醗酵してゐやうとも、心な  
き外界の人々には想像だにつきませぬ。殊にその寂しさが強け  
れば強いほど、壯士慘として驕らずと云ふやうに却つてしんく  
として、心の郷土に一種云ふべからざる寂靜が横はります。それ  
は悲しみ充ちて齒をくひしばる嚴肅さであります。

こうして泣くに泣かれぬ程に心が張りつめてゐる時は、人は却  
つて愚にもつかぬことを云つたり笑つたりするものであります。  
第三場は恰度そのやうな場面であります。  
王宮内の暗室にどんな悲劇が起つてゐるか、それは外界の市民  
達にわからう筈がありません。市民達には王の存在さへもわか  
らんのです。第三場は第一場の續きとも見るべきもので、各國の  
王妃は、驕りの春の庭園内をそゞろに歩るきながら、暗室王の祭典  
が今始るか、始るかと待ちわびてゐる。それにしても此自由の王  
國には、他の國のやうに祭典に際して特別階級的の座席を設けよ  
うとはしない。勿論各國の國王席も造つてゐない。神の恩恵は  
萬人が等しく蒙らなければならぬ。かの智識に秀て徳行に誇る

人達でなければ往生することの出来ぬ郷土は、眞實の人間性に眼ざめ、眞實の郷土を求めんとする人から見ればむしろ化土である。けれど心の驕れる各國の王達は、此國の王が彼等を歓迎しないのだらうとあやしむ。此處の王が一番賤しい人間や普通の平民でも安々と近寄ることの出来る森の中で祭典を行はんとする。任方を非難したり、さては此處の市民がこんな不都合の祭典を行ひながら平然として何もあやしまうともしないのは、まだ實際の王を一度でも持ったことのない證據だなどと話し合つてゐる。恰度佛壇を持つてゐない人間には宗教心がないのだと云つたり念珠や十字架を持つてゐるかない人間には信仰がないのだなどと云ふ連中のやうだ。

こうして各國の王達は色々王についてかれこれ云つてゐるけれども、それは自分達が特別待遇されないと云ふ不平からであつて、暗室王の存在をどこまでも見究めやうと云ふ熱心があるわけでない。それよりも暗室王の妃スダルシヤナの美容さへ見ればよい。吾輩が此處へ來たのは全くあの女のためだ。自分の姿を見せまいとする王を見逃がしたつて私は何とも思やしない。それを見れば、見るべき價値の充分にあるものを見ずに行つたとすれば、それこそ全くの失敗だからね。と、或る王が胸の中をさらけだすと、すべてがそれに同意する。そして腹黒い計畫を立てる。そのうちにも最も腹黒いのはカンチ

と云ふ王である。カンチ王は此度王妃スダルシヤナの求道心を幾度となくさまたげるのです。恰度侍女スランガマが善玉でカンチ王が悪玉の役をつとめて、此劇を益々水火相剋の渦の中へ巻きこませるのです。

各國の王達が腹黒い悪計にニヤリと笑つてゐる處へ、第一場にも度々あらはれた老哲人が、春の光に酔うた少年達をひきつれて、心豊かに榮光讚美の歌を合唱しながら、胡蝶の如く舞うてくる。

「私達は空手の楽しい音楽隊だ。私達は場所がなく困つてゐるものぢやない。私達は争ひの種になるやうなことは大嫌いだ。彼等は歌ひだす。」

吾等は何ものをも持たず

げに吾等は何ものをも持たざるなり！

吾等は只楽しく歌はんかな

fol de rol de rol。

あるものは黄金の砂敷ける沼の上に

己が家の壁を高く築く

吾等は彼等の前に立ちて歌はんかな

fol de rol de rol。

掏摸は吾等の周囲をさまよひ

吾等は恭々しき貪慾の一瞥を與ふ

吾等は空の財布をはたきて歌はんかな

fol de rol de rol。



妖婆が吾等の扉に死の刻印を捺す時に

吾等は指にてその顔を撥き

吾等は樂しき合唱もて歌はんかな

*fol de roi de roi。*

此處へ暗室王のまねをした賈の王が、祭典を司るべく一行を仰々しく飾り立て、キムシユクの旗を翻へしてやつてくる。各國の王達には之れが眞の王だとは思へない。

「誰だつてこの王のない國に王のやうな風をして通ることは出来るよ。」

「けれ共あの男は全く立派だ——あの姿では人を引きつけずにはおかないよ。」

「ナトニ彼は吾々の眼を喜ばすかも知れないが、もし君がずつと近寄つて彼を見るなら決して見過るやうなことはないよ。」

と、カンチ王は今にも賈王の面の皮を引き剥いてやらうと待ちかまへる。そして賈王はカンチ王の悪計にかゝつて遂に賈であることを告白するけれども、各國の王達は王妃スダルシヤナを見ればよいのだから、賈王の罪をゆるして王妃に自分達を紹介する勞を執らせやうとする。賈王は快諾して、やはり眞の王の如く莊嚴らしく祭典に臨む。

一方市民達の方では、此王が眞の暗室王でないことを知りかけて來た。けれどそれはほんの少數である。

「祖父さん、第一の市民は、かの老哲人にかう呼びかけた。『私は云

はずにはゐられませんが……え、五百度もそれを繰り返して云ひます……私達の王は全く詐欺師です。

第二の市民は云ふ、死人を何時までも寝かして置くことは出来なう。

第三の市民は云ふ、私達は私達の王が偽りの、何んでもない、空虚な影であると云ふことを全世界に宣言しよう！

自分達が常々自分達の神であると思つて居つたものが、單なる空虚の影にさへすぎないと知つた人々は、暗室王までもゐないものゝやうに思つて叫ぶやうになる。化佛は空虚の影にちがひない。けれど眞實絶対の如來までが無いのだとはどうして云ひ得よう。かの老哲人は絶対の如來のゐますことを知つてゐるから、

化佛の虚無に眼ざめた市民達を祝福することは出来るけれども、吾等各々を眞に救済せんとする眞實一佛の「暗室王」もゐないのだとは云はない。そして老哲人は微笑を浮べて「友達よ、私達の王が何處にもゐないと云ふことがいひたかつたら云つて歩きなさい。それもまた祭典を祝ふ禮式の一つだ」と、軽く受けて流す。

#### 第四場

王妃は宮殿の高い塔に登つて、遙かに群集の泡き立つ祭典の式場を一心とりつめて眺めてゐる。彼女は此群生海に顯現せんとする「暗室王」を見出さねばならぬ。

群集に取り囲まれてキムシユクの花の旗が翻へり、その傍に偽りの王が立派に着飾つて王らしく装うてゐる。王妃にはそれが

偽りの王であることを知らないから、彼こそ日頃戀ひ慕つた暗室王にちがひないと思つて、王を發見した印としてロヒニと稱する彼女の友に花を持たせてやる。

使者はついでに行つた。どんなの返辭をもたらずであらうか。王妃の心は慄へてゐる。恰度月の光りが天空に溢れて泡立つ酒が漲り流れるやうに、それが又悲しい狂酔のやうに彼女の心の隅々までも慄へさせる。

待つにやるせなき王姫は、この胸の苦しさに堪へられず、折しも並樹道を歌ひ歩く少年達を見出して、せめてその歌でも聞いたら胸も靜まるだらうと思つて、侍女をして呼ばしめる。さあ、少年達、お前達は、若き春の生ける象徴だよ！どうかお前達の祭りの歌

を歌つておくれ！妾の心も身體も皆歌をうたひ、樂を奏してゐるのだ。けれ共云ひ知れぬ旋律が妾の舌から逃れて行く。さあお前達、妾のために歌つておくれ！

この春の夜こそわが悲しみはいとわれに快し。

わが苦しみはわが愛の合奏を叩きて靜かに歌ふ。

幻影はわが悲哀の眼より生れて日光の空に飛ぶ。

林地の深き底より湧き起る薫はわが夢のうちにその道を失ふ。

言葉はわが耳に來りて私語けども、その何處より來りしかを知らず。

わが蹀環の鈴はわが心の感ずるがまゝに震ひ鳴るなり。

歌のかなしい旋律が王妃の胸の奥に深く秘められた何物かに  
鳴り響く。王妃の胸は苦しくなつて聴くに堪へない。「もう澤山  
もう聞いてゐられない！お前達の歌は私の眼を涙で一ばいにし  
てしまつた……一つの想像が浮んで来て……その想像が一  
つのものを捕へやうとするけれどもどうしても捕へることが出  
来ない。あゝ、王妃は達せんとして達せられず、達せられないと云  
つてあきらめもされぬ無限の憧憬に呪はれて惱んでゐる。王妃  
にはもはや王妃としての高き位が何にならう。その頸飾は唯堅  
い石で造られてゐるまでだ。それは只冷たさと、堅さとを感じさ  
せる外に何もない。王妃は之等一切を投げすて、この憧憬の導  
くまゝに夢中になつて思ふがまゝ、森地の生繁つた心の樹の中を

歩いて見たい。

かの女には少年達が歌ふやうに此春の夜こそわが悲しみはい  
とわれに快しと歌ふことは出来ない。悲哀は悲哀のまゝに横た  
はつて輝かうとはしない。苦惱は苦惱のまゝに横はつて愛の合  
奏を歌はない。

彼女はまだ外に如來の聲を聴かうとしてゐる。そして内より  
折さへあれば溢れ出やうとする如來の誕生の聲に耳を借さない。  
彼女は如來を求めゆく自己のみを知つて如來に求められてゐる  
自己を知らないのだ。

ロヒニは遂ひに歸つて來た。そして王妃が王を見出した印の  
贈物なる花は注意されなかつたことを聞いて、王妃はそれが眞の

暗室王でなかつたことを知り、王妃としての自尊心を傷つけたことを後悔する。

「あゝ私は駄目だ！私の鐵面皮が今罰せられたのだ。今晚の祭りは私のために恥辱と慚愧の扉を開いたのだ」と王妃は獨り悲痛の中に泣き入る。

かうして一大打撃が王妃の誇りを微塵に碎いて仕舞つたけれども、美しく畫いてゐる王の姿を消すことが出来ない。王妃にはそれが不思議に思はれる。王妃はやはりどこまでも王に執着してゐる。王妃は叫ぶ。「私の心は碎かれた！私はこの頸飾を棄て、しまひたい。けれ共それが出来ない。この頸飾は恰度荆棘の花環のやうに私をチク／＼と刺す。けれ共私はそれを投げ棄てる

ことが出来ない。この恥辱の頸飾こそ祭の神が今晚私に持つて来てくれたものなのだ！」

## 第五場

群集は祭典を祝ふために互に紅い粉を投げ合うて狂歡のかぎりをつくしてゐる。紅い粉は愛の象徴である。

哲人は群集の一人に向つて、王妃にも紅い粉をふりかけたかと訊く。訊かれた男は「たれが王妃に近寄ることが出来ませう？王妃は構内深く這入つてゐる」と答へる。

王達の解釋する愛と群集の解釋するそれとは異つてゐる。そして王達は群集が喜ぶときには共に喜ぶことが出来ない。そして王達の番兵どもは劍を振つて群集の近付くことを制禦する。

王達の持つてゐる粉は群集の持つてゐる粉と違つた赤いものである。

老哲人は云ふ。「さうだよ、友達——あの男からは常に離れてゐるが好い。あの男たちはこの世界の亡命者なのぢや……。」  
かれ等王達には眞實の愛は到底わからないのだ。縁なき衆生である。だから群集は、自分達の信念を以て彼等を同等に取扱はなければよいのだ。

歌ひ手は歌ふ。

すべての黒と白とはその區別を失ひ

汝の足の色澤いろざらの如く……紅くなりぬ。

紅はわが胸衣なり、紅はわが夢なり

わが心は紅き蓮の如く波立ち慄ふ。

眞紅の眞實心、それは愛の紅粉である。すべて此世の黒白の差別相は大愛によつて眞紅に溶け合ひ、眞紅に燃えあがる、愛の人には天地もない。見渡すかきり満天満地四維上下、すべてのものが赤く輝き、すべてのものが響きをあげて合奏してゐる。愛こそ眞實である。

一方、悪漢のカンチ王と偽りの王とは審議を凝してゐる。カンチ王は王妃スダルシヤナを手に入れん爲めに此偽王をして宮廷の花園に火を放たしめんとする。

第六場と第七場とは火事の場面である。カンチ王等は思ふたよりも火の手が盛になつたので、遂には彼等は逃げる道も解らな

いやうになる。

## 第八場

場面は宮延内の暗室。暗室王と王妃スダルシヤナとの對話によつて始まる。

「恐れなくても好い……火は此室まで來はしない」

「私は恐れはいたしません。けれ共、おゝ恥辱が燃える焔のやうに附纏つてをります。私の顔、私の眼、私の胸、私の肉體のすべての部分があの焔に焼かれ焔に燃やされてゐます。」

「王妃は惡業の頸飾を捨てたいとあがきまわつてゐるけれども、どうしても投げ棄てることが出来ない。惡業は炎々と燃えあがる。王妃は云ふ――」

「……火が私の周囲を取巻いて來た時に、私はその頸飾を火の中へ投げ込まうと思ひました。けれ共、いゝえ私には出来ません。私の心は――その頸飾をお前の死ぬる時お前の上に置け――と囁きました。……おゝ王様、この火は何んで御座います？あなたにお目にかゝりに出て來た私は、焔に抵抗することの出来ない蟻のやうにその中に躍り込みました。何といふ痛み、おゝ、何といふ苦しみてせう！焔は永久に猛り狂ふやうに燃えてゐます、けれ共私はその焔の中に生きて行きます！」

「けれ共遂々お前は私が判つたのだ。お前の希望が充されたのだ」と、王は語るけれども、王妃はこんな恐しい業火の中に眞實の如來

に逢はれるものだとは思はない。王妃はかうして燃えゆくもの滅びゆくもの有限のものゝ上に永久の生命、眞實の救主の面影に出逢ふやうに探しはしない。彼女は此火焰の中に何を見たであらうか。彼女は云ふ――

「恐しい、おゝ、それは恐しいものを見ました！ 私はそれを思ひ出すのさへ恐しう御座います。黒い、黒い、おゝ、あなたは常闇のやうに眞黒い方で御座います。私は唯一寸あなたを見たばかりで御座います。焰があなたの姿を照しました――あなたは彗星が私達の眼界を恐しく過ぎゆく時の、恐しい夜のやうに見えました。おゝ、その時私は眼を閉ぢました。私は最早凝つと見てゐることが出来ませんでした。恐しい暴風雨の雲のやうに黒く、荒狂ふ波

の上に怪しげな赤色の月が照つてゐる果しない海のやうに黒う御座いました！。

彼女はもはや暗室王と一致することが出来ないと思つた。暗室王に對する今迄の愛、今迄の憧憬は彼女から消え失せやうとしてゐる。彼女は胸の苦痛を一時でも忘れるやうな美の神を求め始めた。美の酒にひたり、美の魔法の中に全身を投げだして忘我恍惚の生活を送りたいと希うてゐる。「あなたのやうな黒いお方は嫌やてす！ 私の愛してゐるものは、クリームのやうな柔かな、シリヤのやうにデリケートな蝶のやうに美しい方で御座います」と彼女は云ふ。王はそれは蜃氣樓のやうに儂りな泡のやうに空虚なものであるとして云ふ。そして王は王妃の魂を恐怖を以て慄はし



たその物凄しい眞の暗闇は、いつかは王妃の慰めとなり救となるだらうし、王の愛はその他の爲めに決して存在しないと云ふことを告げる。

けれど王妃は王の傍に立つてゐることが出来ない。王に就いて考へることさへ苦痛である。まして王と一致させやうなどとは夢にだに思はれない。もし出来た處でそれは偽りである。彼女の汚れた思想、不信仰な思想は常に彼女を追ひ駆けて彼女を永久に苦しめるにちがひない。

道を求めるものは眞にすべてを投げうつて只如來のおん胸に恭順しなければならぬ。王妃にはそれが出来ない。そうかと云つて胸の奥には勇しく王に反抗して王を捨てることも出来なう。

王妃は居るに居られず去るに去られない惨しさに胸もかきむしられるやうだ。

王は好し、それならお前の好きなやうに遠い處へ行くがよいと、王妃の云ふがまゝにゆるしたけれど、王妃はそれが尙ほ更恐しくなつた。王妃は云ふ。「私はあなたから去ることが出来ません。あなたは私の行くのをお止めなさいないので、——なぜあなたは私を引止めて私の髪の毛を掴んで、——お前は行つてはいけない——とおつしやつて下さいませんか？ おゝ私を罰して下さいませ、そのお手で激しく打つて下さいませ！ あなたが何事もおつしやらないので私は狂ほしう御座います。」

けれど此落ちきれない心も漸く落ち付き、はるかより呼んでゐ

る業縁の呼び聲に促されて、彼女は大膽にも王を捨て、暗黒の淵に沈むべく決心する。王は云ふ。

「お前の行く道には誰も立ちほしめない。嵐に追れる破雲のやうにお前は自由に行くことが出来るのだ」

「今私は錨の繩を解いてゐます。多分私は沈みませう。そして最早私は歸つては参りません」。

王妃は暗室から馳け出す。

## 第九場

スダルシヤナの父王なるカンヤ、クブヂヤの王は、スダルシヤナが暗室王を見捨て、宮殿を逃げ出たことを聞いて、大臣達を集めて凝議してゐる。スダルシヤナは河堤の街門の外に待つてゐる。

父王の怒りは烈しかつた。そして大臣達がスダルシヤナをゆるして宮殿内に案内しやうとしたけれどそれを止めた。

「なにあれは不屈にも自分の良人を捨てた奴ぢや。あれは自分で勝手に王妃の位を棄てたのぢや——もし私の家に留つてゐたかつたら召使として働かせてあげ」。

大臣達はそれはあまりにお氣の毒だと申入れるけれども、厳格なる父王は彼女を救ふことは父としての價値を無くすることだと云ふ。父王はスダルシヤナが恐しい災難を脊負つて來たやうに思つて慄へあがる。

## 第十場

スダルシヤナは侍者スランガマと共に父王の宮殿に入つて下

婢の役をつとめてゐる。心は目を追うに従つて荒れて行くばかり。これぞと云ふ理由もないのに急に怒り出して見なくなる。彼女は自分ながら自分の心がわからない。彼女は此世のすべてのものが滅亡してゆく處を見たい。彼女は道を捨てたのだ。かうして悲惨の牢獄に身を投げて、日一日と墮落して行くのだ。彼女は どうして温順に下婢の役をつとめてゐられやう。

「何故悲しみの火把が私のために世界中に燃え上らないのだらう。なぜ大地が揺れ震はないのだらう。私の墮落は小さい豆の花が落ちたほどにも感じられないのだらうか。私の墮落は烈しい焰を上げて天を眞二つに裂く灼熱の星が落ちたよりも、もつともつと大事件ではないか」

「大きな森が火災を起す前にはその中で燻ります。時が未だ来ないので御座いませう」

「私は王妃としての名譽も光榮も塵や風の中に投げ棄て、しまつた。けれども私の寂しい靈に會ひに来てくれるものは誰もないのか？ 唯一人……あ、私は全く、全く、唯一人だ！」

かうして彼女は彼女の永い間の理想を捨てたけれど、日々に廢顔し行く苦痛に堪えられない。けれど彼女は死ぬわけにゆかぬ。生きてゐるものには又やはり何等かの理想が湧かずにゐない。恰度無理想を以て立つた自然主義者にやはり無理想と云ふ一種の理想があつたやうに。

彼女が墮落と云ふことに一種の力を見出したことは、善を理想

とした以前の生活とは反対のやうで有るけれど、善と悪とは一紙の両面である。善を追うて眞の人間本然の生活に眼覚めることの出来ない彼女は、悪を追うてもやはり眞實の生活に至られないにちがひない。只眼の先きが一寸異つたまでである。彼女が悪を悦ぶやうになつたのは、右を求めた以前の方向を左に向けたままである。眞實の世界は遠く彼女の前方にひらけてゐるのだ。暗室王は此眞實の世界から彼女を呼んでゐるのだ。けれど彼女にはそれがわからない。彼女は暗黒の涙の淵に沈んで悪魔の悦びを味ひたいと思つてゐる。

「自分達は宗教の上に慰安や、力を見出だすことが出来ない」と云ふ人は、必らず未だ一度も眞實の宗教を求めない人である。所謂

傳習的の宗教を求めて、それを眞實の宗教の如く思つてゐる人である。傳習的宗教は一派一門の宗教史であつて宗教そのものではない。

王妃は今や不思議の死骸を胸に抱きしめてゐるのだ。そしてその死骸をそのまゝに抱くさびしさに堪へられずに泣いてゐるのだ。彼女は死骸に白粉を塗つたり紅を指したりして、その不自然の技巧によつて死骸を飾ろうとしてゐるのだ。けれど死骸は死骸であつて永久生きることはないのだらう。

王妃はあの火事の夜を想ひ出した。大きな宮殿を焼きつくすあの火焰の姿は何んとした輝かしい勇しいものであつたらう！何とした嬉しいそして大それた罪であつたらう！あの恐しい罪

の喜悅は、すべての苦痛を忘れしめた。あゝ、けれどその喜悅は何處へ行つて仕舞つたろう。今は下婢の身となつて塵埃の立ちのぼる暗い部室に死骸の如く横はつてゐるではないか。あゝ、あれは一場の幻であつたらうか。

それにしても思へば暗室王が恨めしい。彼女がこんな悲惨の生活に入るやうになつたのも、暗室王が彼女を引きとめやうとしなかつたからであると思ふ。自省心なき彼女は自分の業縁によつてあらはれた今の境遇を恰かも暗室王が造つたらしく思つて暗室王を賤しい残忍な恥知らずだと罵る、こんな冷酷の暗室王に對して侍女のスランガマが何故朝な夕な敬虔の奉侍をつくしてゐるのか、王妃には解らない。侍女の胸のうちは、おゝ、あの方が何

時まで岩のやうに頑固で殘忍であれば好い……私の涙も希願も決してあの方を動かさなければよい……私の悲しみは何時まで私だけに止めておいて下さい……そしてあの方の光榮と勝利とを永久にあの方に與へて下さい！と云ふ信順そのものである。彼女は苦痛になればなる程却つてその苦痛は光りを放ち、益々歸順の悦びにみだされる。彼女は如來と自己とを二つにはなしてゐない。如來の光榮、如來の勝利が直ちに彼女の光榮、彼女の勝利である。悲しみの涙を取り去つては彼女には眞に生き甲斐を感じることが出来ない。彼女の修道は自己を殺さんとする苦痛の修行ではなくて、修道の上にも眞實の自己に接する法悦の大道である。止むに止まれぬ要求感より進み上る勇奮

である。

遙かの曠野を越へて東方の地平線上に塵が雲のやうに立ちあがつてゐるのが見える。王妃は驚いてその方を見つめてゐると、塵は益々立ちのぼる。そしてその中から旗のやうなものがチラチラひらめく。

「あれは兵車の旗ではないかい？」

「本統にあれば旗で御座います」  
「ではあの方がいらつしやるのだ。到頭あの方がいらつしやるのだ」

「どなたがいらつしやるので御座いますか」

「私達の王様だ……どうして外の王が来よう？ 私がゐなくて

あの方がどうして生きてゐられよう？でも昔のことを覚えていらつたのは本統に不思議だね」

「いえ、いえ、あれは王様では御座いません……私の王様はいらつしやる時、あのやうな塵をお立てになりはいたしません。いらつしやる時は全く誰も知りません」

「けれどもそれは暗室王ではなくて、カンチ王と、彼れの侍者としてあつた。」

王妃は之等の人等が、塵や屑の部屋から彼女を救ひ出しに來たのだと思つて喜ぶ。殊にカンチ王の侍者の美貌はいたく彼女の心を引く。彼女はスランガマのやうにいつまでも暗室王に對して柔和と信順であり得ない。彼女はスランガマに云ふ――「お前

の王様は全く好い人だ！お前の王様は私をこの墮落から救ひに來ようともなさらなかつた。それだからと云つてお前は私を責めることは出来ない。又私は東縛された奴隸のやうに、恥かしい苦痛を忍んでこんな所に一生あの方を持つてゐることは出来ない。私はもうお前の柔和は入らない、お前の従順も入らない」と終りに暗室王を離れて虚偽悪徳の美酒の中へ躍り込まうとする。

けれど彼女は眞に暗室王を離れ去ることが出来るであらうか。彼女は人間最深の胸底より浮び上る本然眞實の呼び聲を殺して美酒の中にいつまでも甘い夢に耽けることが出来やうか。それはともかく彼女の魂の一角に漸く火がついて來たのだ。業火は炎として燃えあがるだろう。眞實の如來は必らず此業火の中に

顯現して救ひの御手をのべ給ふであらう。吾等は更に彼女の前途を息を凝して見つめなければならぬ。

## 第十一場

カンチ王は飽くまで王妃スダルシヤナを手に入れやうと、執念深くも王妃の父王カンヤ、クブヂヤの國へ攻め寄せて來た。

場面はカンチ王の陣營である。そこへカンヤ、クブヂヤ王の使者が來て、スダルシヤナを渡すことは出来ぬと云ふ。

それと同時に過ぎし日、暗室王の祭典に列席した他の王達もやはり王妃を奪はんとして攻め寄せて來た。彼等は皆強慾の眼を光らせて吾こそ王妃を得んものと競争する。カンチ王は云ふ……最初に吾々同士は互ひに闘はねばなら

ぬ。然し第一番にカンヤ、クブヂャと戦つてそれから六ヶ敷くない方法を見つけやうと。戦は先づカンチ王とクブヂャ王との間に開かれた。

## 第十二場

宮殿の内部である。王妃と侍女との會話。

「まだ戦つてゐるのかい？」

「矢張り激しく戦つてゐます。」

王妃は父王の身の上を案じて氣が氣でない。彼女は父王が出陣の時残された言葉、

「お前は一人の王の許から逃げて來たのだ、併しお前はお前の背後から七人の王達を引張つて來た。私は七人の王の爲めに、お前

を七つに切つてそれを王達に分けてやろうと思つてゐる」を思ひ出して、せめてその身を七つに裂かれた方が増してあつたらうと悲嘆の涙にかきくれる。彼女はふと暗室王を思ひ出してスランガマに云ふ。

「もしお前の王様が私を救つて下さる力を持つていらつしやうたら、現在の私の有様を見て凝つとしていらつしやるだらうか？」  
「王妃様、何故あなたは私にお尋ねなされるので御座いますか？ 私が王様のお答へをする力を持つてをりますか？ 私の理性は眞暗で御座います。其爲めに私はあの方を判断することが出来ません。」

王妃は「あゝ、私は前にく死んで仕舞へば好かつた！」と嘆く。



王妃は上氣したやうな瞳をうるませで、はるか空を見上げる時のやうに心の奥に残つてゐる暗室王の宮殿を想ひ起す。

彼女が夕方衣服を着かへると、よくあの宮殿の古窓の側に立つのが習慣であつた。その時燈火のない集會場の眞暗な闇の中からは何時も音楽の節奏が、噴水の豊かな熱情のやうに、舞ひながら慄へながら流れて來た。ああ、然し今となつてはすべて過ぎし日の夢である。

スランガマもあの暗室を思ひ出して、お、深いそして快い闇！奥深い神秘の暗黒！」と叫ぶ。

王妃は彼女に語る。

「なぜお前は私と一緒にあの室から出て來たのかい？」

「それはあの方が私達の後に附いて來て、私達を連れておかへりになるだろうと思つたからで御座います」

「しかし、否え、あの方は入らつしやらない……あの方は全く私達をお見捨てなすつたのだ。どうして見捨てずにいらつしやられやう？」

「もしあの方がそのやうに私達をお見捨てなさるなら私達にはもうあの方は要りません。その時はあの方も私達の爲めに生きてはゐられません。その時はあの暗室は全く空な無稽なものになつてしまひます。——そこでは最早あなたを呼ぶことも、私を呼ぶことも出來ません。其時は總べてのものが幻影となり、總べてのものが懶い夢となつてしまひます。」

眞實の如來の誓願は、いかに私達が虚偽や罪惡の淵に沈淪しやうとも決して捨ない。必らず攝取せずにはおかぬ。その罪惡の奥深くに秘めらるる眞實の芽を成長させずにはおかぬ。そして生きとし生ける一切の群生を燦たる世界に導かずにはおかぬ。それが如來の大信であり大行である。

けれど若し此大信と大行とが如來になかつたならそれは眞實絶對の如來でなくて諸佛である。諸佛には私達群生を救ふ力がない。王妃の念ずる救主は諸佛であり、侍女の念ずる救主は如來である。侍女の最後の答は眞に如來の誓願の上に生きてゐる信念の聲である。

此會話中に唐突として門番が這入つて来て、カンヤ、クブヂヤ王

が敵軍の爲めに捕虜になつたことを告げる。王妃は驚いて氣絶する。

## 第十三場

カンチ王とクブヂヤ王との戦は遂にカンチ王の勝利に歸したけれども、カンチ王は王妃を手に入れる爲めには尙ほ七人の王達と戦はねばならぬ。けれどカンチ王は惡計をめぐらして、王妃の方で好いた王が王妃を獲ることに媾和の條約を結んだ。

カンチ王の侍者でスヴァルナと云ふ男は美しい男であつた。王妃は少なからず此スヴァルナに心を寄せて居つた。そのことを知つてゐるカンチ王は、此男に當日の傘持ちの役を申し付けた。カンチ王は、王妃が必らず此男に花環を與へるにちがひないと思

つた。それでカンチ王は此男を黄金や寶石に飾り立て、他の七人の王達と共に王妃の來るのを待つた。

## 第十四場

王妃は侍女と共に窓側に立つてゐる。

「それでは私は王達の集まつてゐる場所に行かねばならないのかい？ それより外には御父上を救ふ方法はないのかい？」と王妃は嘆きかなしむ。

窓から外を眺むれば王達は吾こそ王妃を得んものと美装を凝して待ちかまへてゐるのが見える。

その中に一段際立つて美しく輝いてゐるのはカンチ王の傘持ちをしてゐるスヴァルナである。王妃の瞳は早くもその上にと

まる。けれど王妃の心はもはや彼の男の浮薄の美装にひかれる程浮いてゐない。「あのやうな美しさがどうして私の心をとるかそう！ あゝ、あんな不淨なものを見た私の眼を清めるのには私はどうしたら好いだらう！」と侍女に向つて嘆く。侍女は「あの底も知れぬ闇の中でお洗ひ遊ばせ」、聖き暗室によらては此心の痛みを慰められる所はないと云ふことを暗示する。

王達の使者は早く早く、王妃の來んことを催す。今や王妃は只一心に暗室王の救ひを求める外に道がない。

「あゝ王様！ 私の唯一人の王様！ あなたは私を唯一人お残しなさいました」と彼女は呼ぶ。そして胸中から懐劍を取り出して。

「私のこの肉體は汚れました。私は………」

には不信實な瑕のないと云ふことを知つてゐます。それを今私はあなたにお話することが出来ないの御座いますか？

あかたが私に逢ひに来て下さつたあの暗室は、今私の胸の中に空しく横はつてをります。けれ共……お、王様。あなたより外には誰もその扉を開くことが出来ません。……お、王様！あなたは最早この扉を開きには入らつしやらないの御座いますか。それならば私に死を來らせて下さいませ。死はあなたのやうに暗く、あなたのやうに美しい姿をしてをります。それはあなたです。お、王様。それはあなたで御座います。

第十五場

七人の王達は王妃の來るのを今か今かと待つてゐる。各々が

些か不安になつてくる。暫くして人々のどよめきが聞こえる。王達は愈々王妃が來るのだらうと思つてゐるのに案外にも巷から巷へと唄ひあるくかの老哲人が、暗室王の使者なりと稱して嚴めしい將軍の服装でやつてくる。

王様は何が起きたのかと恐れわなしく。中にもカンチ王の傘を持ちしてゐるスヴァルナは、いつの間にか逃げて仕舞つた。けれどカンチ王だけは、宜しい折角の好意だからその禮儀と温和とに酬いるために適當な場所に行くことにしよう！けれども彼に服従しては無い。戰場に彼と戦ひに行くのだと、飽く迄豪語を放つ。

此戦争の様子は第十七場に、市民達の口から報告されてゐる。

戦争はカンチ王側の敗北によつて終つた。彼等の破れたのは彼等が一つの信念の上に立つことが出来なかつたからだ。各々が各々の身の上のみ眼をつけてゐる利己主義者だから、各々が各々で疑り合つた。そして破れた。けれどもカンチ王だけは他の王よりも勇ましく戦つた。そして胸に敗北の疵を受けたことは、味深いことである。彼の救はるべき日が近付いたのである。けれども他の王達は負傷せるカンチ王を唯一人野原に残して逃げ去つた。そして遂ひに捕虜となつた。如來を信ずることも出来ず、又飽くまで如來と戦うことも出来ない卑怯のものである。之等の人達は決して救はれないだろう。

第十六場  
 既に一命を捧げやうとした王妃の命は、はからずも暗室王の出現によつて助けられた。戦は終つた。王妃は此度こそ暗室王が迎ひに来てくれるだろうと、侍女と共に待ち侘びてゐる。王妃は愈々暗室王に逢はれるかと思へば嬉しくてならないけれど、さて愈々逢ふとしたらどうしやう。永い間の恐しい罪が恥かしい。今更何の面目あつて王に逢はれやう。私はやはり恥辱と共に死んで行くのだ。私の顔をどうしてあの方に見せられやうかと嘆く。こうした王妃の心持ちは一見殊勝に見えるけれども、未だ自分の罪を氣に病んで之れでは王に逢

はれまいと思うのは、一切を攝取して捨てざる王の慈悲が透らな  
いのである。心の底にはまだ取りつくろうてゐる。王に對して  
何となくよそよそしい處がある。それはまだ王を信じないので  
ある。一切を抛つて只王の呼び聲に歸命し得ない豪慢である。  
侍女は王妃の此高慢心に向つて、心から謙讓と歸命とをもつて  
あの方の許にいらつしやいませ、そしたらすべての恥辱が直ぐに  
消えます」と戒しめる。

「蚊帳を出て、まだ障子あり夏の月」とか云ふ俳句があるが、王妃は  
罪のものであることを自覺してゐるものの、まだその罪を邪魔も  
のにしてひつたりと月光を浴びることが出来ないのである。此  
障子が放たれないうちは、王妃はやはり隣室の人でなければなら

ぬ。

王の方でどれ程來たいと思つても、此王妃の胸へどうして這入  
ることが出來やう。王は遂ひに來なかつた。そして王が戰場か  
らどこへ行つたかその足跡さへ見出すことが出來なかつた。

王妃はそのことを老哲人の口から聞いて驚きをののく。

「全くあの方は行つておしまひなすつたのですか！お、お、何  
と云ふ無情な、何と云ふ冷酷な、何と云ふ残忍な方だらう！あの方  
は私を石にしておしまひなすつた。あの方は鑽石のやうに固い  
お方だ！……よろしい。私はあの方がどの位頑固でいらつし  
やるか試して見ましやう。私は此處の窓の處に一言も云はずに  
残つてゐましやう！私は一寸も動きません。……私はもは

やあの方は入らない。私はもはやあの方を探さない。……あの方は私を塵のやうに賤しめてそれでまだ満足なならないのだ！

彼女はこうして幾度も大空に向つて毒矢を放つ。矢は幾度も彼女の胸に歸へるのであらう、彼女の最後の扉をつらぬくまで。恰かも親鸞を射殺さんとした山伏辨圓が、たちどころに弓箭をきり、刀杖をすて、頭巾をととり、柿衣をあらためて後悔の涙にむせんだやうに。

第十八場 王は遂に戦に敗れて豪

釋尊に對する提婆の如き惡漢カンチ王は、遂に戦に敗れて豪慢の胸に疵を受け、暗室王に對して謙遜な敬意を排ふやうになつ

た。けれど人民達が彼の敗北の姿を見たらさぞ冷笑するだろうと、些かきまり悪く思つてゐる。かの哲人はカンチ王の哀れな心根を察して慰めてやる。

それはともあれ、彼は一介の求道者として、無限の道路をたどり行くあはれな旅人となつた。彼は暗室王に逢ふべく、世界の端まで探して歩かねばならぬ。彼は老哲人に向つて、怪しそうに云ふ。

「おぢいさん！あなたも道路にゐるぢやありませんか」

「私はすべてのものが失くなつてゐる土地に、かうして面白く順禮してゐるのぢや」。

かなしそな歌が響いてくる

われは路傍に佇みて

われ等を導く彼の来るを見守りぬ

.....

彼は汝に知られざる汝を愛す

わが心はひそかなる愛の中に彼に捧げられぬ

われは失はれたる總てのものをたのみつつ

わがすべてのもつて待ちぬ

第十九場

雨の降る日もあらう、風の荒れる夜もあらう、けれど限りなき大

道は永遠の静寂裡に横はつてゐる。恰かも悲しい子供の心を待

ちわびてゐる慈母の懐のやうに。

王妃スダルシヤナは漸く此大道を歩む旅人の心嬉しさを味う

やうになつた。彼女の懺愧の涙は直ちに感恩の涙となつた。彼

女は此道を歩みながら侍女のスランガマに物語る。

何と云ふ救ひ、何と云ふ自由であるう！私をこの自由に持つて

来てくれたのは私の敗北である。あゝ、私は何故あんな鐵のやう

な高慢な心を持つてゐたらう。それを働かし、それを柔かくする

ものは何もなかつた。私の暗い心は、来るべきものは王てはなく

して私こそ彼に逢ひに行くべき筈のものであると云ふ明らかな

真理をどうしても見出すことが出来なかつた。

王妃は現在の此悦びに入るまでの悲しき経路を話しかけた。

「私は昨夜通し唯一人あの窓の前の塵の床の上に寝た。刻々



と刻み行くさびしい時間を泣きながら私はそこに横はつてゐた！南の風が夜通し吹き荒んで、私の心を噛む苦痛のやうに叫び唸つた。そしてその喧がしい戸外の音に反響して闇の中から「話せ！妻よ！」と夜鳥の鳥いてゐるのがはつきりと聞えた！……スランガマよ、それは全く暗夜の頼りない歎きだつたよ！……けれども彼女は、此荒れ狂ふ心の夜の騷擾の奥底から、不思議にも泣き出した程のさびしい、悲しい、けれど柔かにして心地よい笛のやうな暗室王の呼び聲を聞くことが出来た。彼女は驚きかつ怪しんだ。けれど疑はうとして疑ふことが出来なかつた。彼女はこう云つてゐる。

「スランガマや、お前はそれを信ずることが出来るかい……私

の心は淋しい哀れな夜を通して、私を呼んでゐるその歌を聞くことが出来たのだ！……あの方はとうとう私を公道にお出しなすつた」と。

彼女は更に語りつづける。

「私があの方に逢ふ時に、先づ最初に云はうと思つてゐる言葉は『私は私の意思でまゐりました……あなたの入らつしやるのを私は待つてはゐません』と云ふことだ。私は『あなたの爲めに私は困難な、疲れるやうな道を歩きました、そして苦しさと道の長さとの爲めには道中泣き通しました』と云はう。少なくともあの方に逢ふ時にはこの傲慢を持つてゐやう。侍女スランガマは王妃の物語りを聴いて、しかし、その傲慢だつ

て長くは續きませんと云ふ。そして、あの方はあなたがさうお思ひなすつたその前に、已に來ていらつしやるので御座います……  
：あの方より外の方が誰があなたを此處にお送りすることが出來たてせう？」と、侍女は、常に吾等が如來を求めるとは直ちに如來に求められてゐるのだと云ふ。

吾等は此侍女の信念の上に、明かに絶對他力教、即ち如來廻向の宗教の面影を見ることが出来る。

「あの方はあなたがさうお思ひなすつたその前に、已に來ていらつしやるので御座います」の一句を讀むものは、誰しも歎異鈔中の一句「佛かねてしろしめして」とか、和讃中の「彌陀成佛のこの方は、今に十劫を経たまへり」とかの親鸞の深き驚きを想ひ出さずにはゐ

られぬだろう。又王妃が現在の信念を恰かも自分の意思によつて得たやうに思つてゐるに對し、侍女はそれを如來より賜はつたものであると云つてゐることは、佛の方より往生治定せしめ給ふ如來選擇の大信の旨を傳へてゐるのだ。「たま／＼行信を獲ば遠く宿縁を悦ばねばならぬ。王妃が行信を得て、衿持心を持つはさることながら、しかしその衿持心だつて長くは續きませんと喝破する侍女の信念の尊さよ。」  
「如來の作願をたづぬれば、苦惱の有情を捨てずして、廻向を首とし給ひて、大悲心をば成就せり。此大悲心が吾等の心の暗室に徹到する時、かの彌陀の五劫思惟の本願をよく／＼案ずれば、偏に親鸞一人が爲めなりけり」てふ第一人者の耀かしい誕生があるので

ある。「有漏の穢身はかはらねど、心は浄土にすみあそぶ」てふ新世界の歡喜があるのである。そして此歡喜の瞳の向ふところは「一のはなのなかよりは、三十六百千億の、光明てらしてほがらかに、いたらぬところはさらになしの宇宙觀が生れるのである。かくて悲しさも淋しさも苦しさも一切捨てることなき最後の肯定的人生觀に到達し、力強き新生活に入ることが出来るのである。こゝに山川國土草木、一切の群生をして此眞實の宇宙に誕生させずにはおかぬてふ花々しき活躍がある。暗室王の戰闘も此眞實心の發現と云ふより外の意味がないのである。暗室王はつひに眼ざめました。そして侍女に向つて「そうだ！多分あの方がして下すつたのだ。私の心の内に無禮

な傲慢の感覺が残つてゐた間は、あの方が私を全くお棄てなすつたのだと考へずにはゐられなかつた。けれ共私が私の權威と傲慢とを投げやつてしまつて、普通の街に出て來た時に、あの方もまた出ていらしたやうに思へた。今は已に私には疑惑はない。私があの方のために嘗めた、すべての此苦痛、すべての此激しい悲哀は、あの方があの方のお友達として與へて下すつのだ、あゝ、そうだ、あの方はいらした。あの方は恰度あの暗い部室の中で、好く私に觸つて下すつたと同じやうに今私の手を握つていらつしやる、あの方が觸れて下すつた時は私の身體全體が不意に慄へた、今もそれと同じ觸れ方だ！此處にあの方がいらつしやらないと誰が云ふのか？……スランガマヤ、お前はあの方が沈黙の中に、秘

密の中に入らつしやるのが見えないのかい？……。さびしき冬の氷は、いつの間にか溶け去つて常住の春の光はつひに彼女の胸の隅々までも照し輝かせた。彼女は嬉しさあまつて身を震はせる。無限の道路は光りの中に静かに横はつて、悲願一路の象徴の如く煙つてゐる。王妃は敬虔の涙しとやかに、過ぎ來しかたを見返へる。誰だか知らないが、やはり此道をたどる旅人と見えて、しづかに王妃の方へと近寄つてくる。

王妃様！あれはカンチの王様で御座います。

ナニ？カンチの王様だ。

王妃様、お怖れなさることは御座いません。

何故私が怖れやう？怖れる日は最早永久に私から去つてしまつたのだ。

王妃はしとやかにカンチの王を迎へる。カンチの王ももはや昔のカンチの王ではなかつた。彼もまた傲慢の前生涯に別れを告げた、同じ道をたどる一介の旅人である。

カンチの王様、あなたと二人が並んで御一緒に参るのも宜しう御座いませう……それは正しいことと御座いますと、王妃は過ぎし日の涙多きさまんゝのことを思ひ浮べて物語る。私は私が初めて家を出た時に、あなたの道に参りました。そして今再び自分の道に歸つて來て、かうしてあなたとお目にかゝります。あゝ此奇遇は、二人の旅人にとつて夢のやうに思はれる。